

報告にあたって

本学が入学前準備教育を始めたのは13年前になります。これは全国でも導入の早い大学の一つで、取材されることも多くなりました。今年も読売新聞4月10日朝刊で紹介されました。

「選抜するのではなく受験生の可能性を見出す入試」という入試改革を、2000年を機に実施しましたが、それと表裏をなすものが「入学前準備教育」です。入試改革により個性が豊かで伸びる可能性を秘めた学生を受け入れ、その学生の大学生活をスタートさせるためのプログラムを用意しました。

本学の入試は4つの側面から学生を見出すようにできています。

- (1) 高校の推薦と高校までの成績や活躍をもとに評価していく推薦入試
- (2) 将来の夢、意欲、可能性をノートテーキングや面談などで評価するAO入試
- (3) 自分の特技や将来の夢を志望理由書、小論文と面談でプレゼンテーションする自己推薦入試
- (4) 基礎的な学力を見る一般入試

受験生が自分にあった方式で自らの強みを発揮していける入試の仕組みになっています。これまでの日本の入試制度では、受験時点の狭義の学力のみで選抜を行っていますので、どうしても受験科目のみの学習に偏りがちで、逆に多くの才能や可能性を見いだせませんでした。さらに学ぶことの面白さに気付かないままに大学に入学してくる学生が多かったです。高校までの学習と大学での学びの質的な転換を早い段階で気付いてもらうことを目的に始めたのが入学前準備教育です。

11日間を通学制にし、90分の授業を3コマ行うスタイルは全国でも本学だけです。通学制の対面授業を実施しているのは大学での学習習慣を身につけさせるためです。また学部を越えたクラス編成と学生スタッフが講義の補助、添削のほか昼休みに面談を実施することで大学に早く慣れ、友だちも作れるというメリットがあります。モチベーションを高めるために強制ではなく申し込み制にしているのも工夫のひとつです。

毎年いろいろな新しい教育的試みを行うのも本学の入学前準備教育の特色です。今年は高校生を対象としたキャリア教育プログラムを行っているNPOカタリバの協力を得て、大学生と新生が一日話し合う「カタリ場」を開催しました。NPOカタリバは先生や親でもなく、クラスメートや友人でもない「ナナメの関係」である少し先輩の大学生をスタッフとして活動しています。

入学前準備教育で行われたプログラムでも、研修を積んだ本学の先輩を含む、カタリバの先輩が受講生とこれまでの高校生活などを振り返りながら、「かっこいい大学生とは？」をテーマに話し合いました。最終日のプレゼンテーションでは、受講生一人ひとりが、自分が考えるかっこいい大学生像と、どうすればかっこいい大学生になれるのかといったことを発表しました。大学入学にあたり、目標と達成するためのプロセスを考えることで、受講生自身がしっかりとした意思を持って大学生活に臨む姿勢がカタリバでは得られました。

最後になりましたが、大学の質保障が求められています。本学の入学前教育はまず学生に「学ぶ意欲」「学習習慣」「基礎学力」の必要性に気づかせ、初年次教育に結びつける重要な意味を持っています。中教審の答申に予習、復習を含めた単位の実質化ということが出てきていますが、その課題に向けてさらなる取り組みを行っていきます。ぜひご理解とご協力をお願いいたします。

2013年5月

聖学院大学 広報局長 山下 研一

目次

講座案内	
合格者へ送付した案内	3
実施要領	5
英語集中講座案内	9
受講者データ	
受講生データ	14
面談記録	17
各教科データ	18
クロージングアンケート結果	20
スペシャル・プログラム報告	
NPOカタリバ 報告	25
プレゼンテーション例	29
就活 NewsNavi 報告	31
実施の総括・実作例	
講師紹介	36
基礎英語	37
基礎数学完成	44
文系国語表現力基礎	46
小論文実作・添削例	53
参考資料	
英語集中講座報告	58
掲載記事	64

入学前準備教育を振り返って



1

講座案内

1. 合格者へ送付した案内
2. 実施要領
3. 英語集中講座案内



2



3



4



5

1. 授業を聞く受講生
2. 就活 News Navi 説明
4. 受講生と面談するスタッフ

3. 先生からのアドバイスを受ける受講生
5. NPO カタリバによるスペシャル・プログラム

合格者のみなさまへ

入学前準備教育のご案内

聖学院大学
基礎総合教育部長
稲田 敦子

新しい年を希望のうちに迎えられたことと思います。お元気ですか。
このたびは、聖学院大学合格おめでとうございます。春からは大学生ですね。みなさんの聖学院大学での活躍に大きな期待をしております。

大学は視野を広げ思考力を深め、人格を向上させることのできる場所です。大学で「何をどう考え何をしたか」ということが、これからの人生を大きく左右します。いわゆる偏差値が高い大学を出たからと言って必ずしも高い評価を得られるとは限らないのは、大学での4年間をどう過ごすかが本人の意欲や目的によってかなり違ってくるためです。大学で受ける教育の成果を高めるためにも、就職・資格試験のためにも、高校までに身につける学力の土台がしっかりしていることが大切です。

聖学院大学は12年連続で、全国の高校の進路指導の先生が選ぶ「面倒見のよい大学」に選ばれました（詳細は裏面）。この入学前準備教育も、本学の面倒見のよさがあらわれたもので、大学の講義をスムーズに受講できるように、基礎知識を固めるためのものです。これからたくさん書くことになるレポート・論文作成能力を高める「国語表現力」、大学での講義やパソコン・インターネット利用に必要な「英語基礎」、「数学基礎」など大学のみならず、就職試験、そして実社会に出てからもよく使うものばかりです。

文系の大学であるのに数学を学んだり、基礎をいまさら確認したりすることに疑問を感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、就職活動をする際に、筆記試験では、中学レベルの数学、英語からも出題がされます。特に小論文や英会話は、高校ではあまり取り組んでこなかった方も多いと思いますので、ぜひ積極的に取り組んでいただければと思います。

この講座は2001年度入学生から実施して毎年改良を重ね、13年目になります。高校や大学、予備校などでの指導経験が豊富な先生が担当し、受講生の方からは「面白い授業で、教科のイメージが変わった」「わかりやすく役に立った」などと感想をいただいております。また90分授業や大学の環境に慣れ、学科を越えた友人が早くできるのも、もう一つのメリットです。

この講座を受講することで、多くの親しい友人ができ、4月からの、大学での学びに対する気持ち前向きになりますので、皆さんの受講をお勧めします。キャンパスでお待ちしております。

なお、この件については、改めて電話でご説明させていただきます。

保護者の方へ

「入学前準備教育」は、大学で学んでいくための基礎学力を確認し、補うための特別な授業です。大学で学ぶことの意欲を高め、授業のほか就職活動の際に必要な一定の学力をつけることを目的としています。本来、高校までに修得しておくべき教育内容を本学と予備校が共同で研究し、作り上げたオリジナルの教育プログラムです。実施は今年で13年目となりますが、毎年、受講生は入学後、確実に成績が伸びています。また入学前にキャンパスに親しみ、友だちができ、4月から不安なく大学生活が始められるというメリットもあります。このような教育は「リメディアル教育」と呼ばれ、いくつかの大学で始まっていますが、聖学院大学の取組みは、全国に先駆けて行ったもので、内容も高く評価され、2012年も朝日新聞で取り組みが紹介されました。「面倒見のよい大学」としては、朝日新聞、サンデー毎日、週刊ダイヤモンドにて、ランクインまたは記事で紹介されています。

なお受講は強制ではなく希望者のみとなっておりますが、大学の学びへの準備、または就職にもつながる基礎知識となりますので、受講をお勧めします。費用につきましては、受益者が負担するという原則で設定されていますが、費用の半額を大学が補助しております。

順位	校名	大学名	所在地	ポイント
1	◎	金沢工業大	石川	262
2	△	東北大	宮城	156
3		国際教養大	秋田	102
4	◎	立命館大	京都	100
5	◎	武蔵大	東京	99
6	◎	明治大	東京	74
7	◎	成蹊大	東京	52
8	◎	中央大	東京	49
	◎	名古屋商科大	愛知	49
10	◎	立教大	東京	43
11	△	東京大	東京	39
12	△	九州工業大	福岡	36
13	△	大阪大	大阪	33
	◎	聖学院大	埼玉	33
	◎	福岡工業大	福岡	33
16		秋田県立大	秋田	32
	◎	国際基督教大	東京	32
	◎	津田塾大	東京	32
19	△	山形大	山形	30
	◎	日本女子大	東京	30
	◎	中村学園大	福岡	30
22	◎	慶應義塾大	東京	29
23	◎	東京女子大	東京	28
24	△	新潟大	新潟	27
	◎	東京理科大	東京	27
26	◎	東京家政大	東京	24
27	◎	多摩大	東京	21
28	△	北海道大	北海道	20
	◎	早稲田大	東京	20
	◎	同志社女子大	京都	20

サンデー毎日(2012/9/16号)
進路指導教諭が勧める大学より

(同封資料のご説明)

大学ジャーナル「姜尚中先生・本学学長対談記事」

2013年4月より、姜尚中先生（東京大学大学院教授）が聖学院大学に全学教授（専任教員）として就任されます。2012年9月、大学ジャーナルに掲載された、本学学長との対談記事を同封しました。

朝日新聞記事「いま、子どもたちは一大学への道」抜粋

朝日新聞で2011/10/5より16回連続で、特集「いま、子どもたちは 大学への道」の中で、“面倒見がいいと言われる埼玉県私立大学”の“政経学部”“人間福祉学部”に入学した学生たちが紹介されました。「聖学院大学」の名前こそ出ませんでした。埼玉県の私立大学の政経学部、人間福祉学部は、聖学院大学政治経済学部、人間福祉学部しかありません。記事では、本学に入学するまでのいきさつや受験した入試、入学後の授業、ゼミ、キャンパスライフについて語られています。その一部を抜粋した資料を添付しましたので、ぜひご一読ください。

2013年 聖学院大学 入学前準備教育 実施要領

目次		
1	カリキュラム内容	基礎英語 …… 2
		文系国語表現力基礎 …… 2
		基礎数学完成 …… 2
2	その他特別プログラム	…… 3
3	時間割	…… 4
4	費用	…… 5
5	申込み方法	…… 5
6	通学について	…… 5
	受講者の感想を紹介します	…… 6
	英語集中講座のお知らせ	…… 別紙
	入学前準備教育申込書	…… 別紙

2月講座【対象：推薦入試、AO入試、スポーツ推薦入試入学手続き者】

内 容 基礎英語、文系国語表現力基礎、基礎数学完成
 期 間 2月6日(水)～8日(金)、12日(火)、13日(水)、
 18日(月)～22日(金)、25日(月) 11日間
 受講料 20,000円

3月講座【対象：推薦入試、AO入試、自己推薦入試、一般入試A・B、スポーツ推薦入試入学手続き者】

内 容 基礎英語、文系国語表現力基礎、基礎数学完成
 期 間 3月6日(水)～8日(金)、11日(月)、14日(木)、
 18日(月)、19日(火)、21日(木)、22日(金)、
 25日(月)、26日(火) 11日間
 受講料 20,000円

英語集中講座【対象：推薦入試、AO入試、スポーツ推薦入試、一般入試A日程入学手続き者】

期 間 2月26日(火)～28日(木)、3月1日(金)、5日(火) 5日間
 定 員 50名
 受講料 10,000円

※1：講座の対象入試は目安ですが、やむを得ない都合がある場合、変更は可能です。

※2：英語集中講座は、所属学科および、英語のレベルによってクラスが異なります。詳細は別資料をご確認ください。

1. カリキュラム内容

*カリキュラム内容は若干変更になることがあります。

(1) 基礎英語

- a. 内容
 基本文法、リスニング基礎、講読ベーシック
 ノート
- b. 回数
 全8講
- c. カリキュラム

第1章	大学生にとっての英語
第2章	英語 基本文法の確認
第3章	英語の音声
第4章	英語 段落構成 一まとまった文にチャレンジ

(2) 文系国語表現力の基礎

- a. 内容
 文系作文、レポートの書き方基礎、小論文添削
- b. 回数
 全8講
- c. カリキュラム

1. 伝え方、考え方の基本	5. 日本社会を考える
2. 小論文の型1 原因追求型	6. 大学で学びたいこと
3. 小論文の型2 功罪指摘型	7. 平等と優先順位を考える
4. 文章を書くための『要約』	8. 他人の作品を参考にしよう

* 記載されているカリキュラムは平均的なものであり、実際は一人一人の進度によって多少違いが出ます。

(3) 基礎数学完成

- a. 内容
 文系で必要とされる数学基礎、就職試験で必要となる数学など
- b. 回数
 全8講



c. カリキュラム内容

1. 円	5. 確率
2. 平行線と角	6. 三角形の性質
3. 立体のいろいろな見方	7. 速さ
4. 立方体の展開図	8. 濃度

2. その他特別プログラム

(1) 自己紹介プログラム (初日)

11日間一緒に受講する友だちと、簡単なゲームなどを通して、知り合うためのプログラム。
学生スタッフがリードしますので、リラックスして参加してください。

(2) 面談 (昼休み)

あらかじめ、面談シートを書いていただき、昼休みに聖学院のスタッフと個別に面談をする時間を設けます。大学でやりたいことなどを元に、これからどんなキャンパスライフにしたらよいか、勉強の仕方、就職の準備など、スタッフの経験に基づきながらアドバイスをします。

(もちろん、面談時間以外の授業の合間や授業終了後も、質疑応答は受け付けています。)

(3) NPO カタリバによるスペシャル・プログラム (2月8日、3月8日)

1日使って、通常授業とは別の形態のプログラムを実施します。今年は、NPO カタリバのキャストと一緒に、1日じっくり、将来のことを考え、語り合うプログラムも実施します。

NPO カタリバは、親や先生など大人との関係でもなく、同年代の友だちやクラスメートとの関係でもない、いわば「ナナメの関係」である少し先輩の大学生たちが主体的に活動している団体です。本学の先輩を含む、カタリバの先輩の話を聞き、そして皆さんが「語る」体験によって、4月からのキャンパスライフ、そして、将来を積極的に考えることができるようになるプログラムです。

全クラス一緒に、グループに分かれて実施するプログラムですので、新しい友達ができるチャンスがあります。友だちができることで、入学後も安心して授業や課外活動にも取り組みます。学生スタッフも一緒になって参加、あっという間に時間が過ぎます。

(4) プレゼンテーション

これまでの入学前教育を振り返りつつ、今後の学生生活でどのようなことにトライしてみたいかなどを各自まとめ (準備)、一人ずつ発表 (プレゼンテーション) をします (実施)。自分の考えをまとめて皆の前で「話す」という練習にもなります。

プレゼンテーションでは、スペシャル・プログラム カタリバで受講生同士が話し合った内容も盛り込んでの発表となります。

※NPO カタリバの詳細報告は、「スペシャル・プログラム報告」ページを参照

3. 時間割

下記は時間割の一例です。(2月、3月講座)

初日に教室やクラスをお知らせします。クラスにより授業の順番が変わりますが内容は同じです。クラスは、いろいろな学科の人たちと知りあいになれるように考慮して決めます。

注) プレゼン=プレゼンテーション (発表)

2月	3月	1限	2限	昼休み	3限	4限
		9:00~9:50	10:00~11:30	11:30~12:30	12:30~14:00	14:10~15:40
	6	オリエンテーション 面談シート	自己紹介	昼食	基礎英語	文系国語
	7	9:00~10:30	10:40~12:10	12:10~13:10	13:10~14:40	
		オリエンテーション 面談シート	基礎英語	昼食	基礎英語	
2月	3月	1限	2限	昼休み	3限	
		9:00~10:30	10:40~12:10	12:10~13:10	13:10~14:40	
8		NPOカタリバによるスペシャルプログラム				
12	7	文系国語	基礎数学完成		基礎英語	
	8	NPOカタリバによるスペシャルプログラム				
13	11	文系国語	基礎数学完成	自習/面談/ 昼食	基礎英語	
18	14	文系国語	基礎数学完成		基礎英語	
19	18	文系国語	基礎数学完成		基礎英語	
20	19	文系国語	基礎数学完成		基礎英語	
21	21	文系国語	基礎数学完成		基礎英語	
22	22	文系国語	基礎数学完成		基礎英語	
25	25	文系国語	プレゼン説明		プレゼン準備	
補講	26	テスト	プレゼン実施1	プレゼン実施2	14:10~15:00	
					クロージング	

※2月6日は、2月講座初日を予定していたが、大雪のため中止した。希望者へは3月26日(火)(3月講座最終日)に参加してもらい、補講とした。

4. 費用

講座名	金額	支払い期間
英数国講座 (2月/3月)	20,000円	(2月講座) ~2/6まで (3月講座) ~3/6まで
英語集中講座	10,000円	~2/25まで
英数国講座、英語集中講座	30,000円	上記に順ずる

入学前準備教育 英語集中講座開講のお知らせ

聖学院大学合格、おめでとうございます。

毎年、聖学院大学新生を対象として、入学前の英語集中講座を開催し、英語学習をととして大学での学びの準備のお手伝いをしています。この「英語集中講座」では、高校で学んだ基礎英語をさらにステップアップし、実際の日常生活の英語を実践します。詳しくは講座内容をご覧ください。この講座は任意参加のプログラムですが、積極的な参加をお待ちしています。

1) 開講日：【5日間】2013年2月26(火)、27(水)、28(木)、3月1日(金)、3月5日(火)

2) 内容： ※詳細は、裏面講座内容参照

A. ベーシック・イングリッシュ English Time

4月から聖学院大学で勉強をする英語のクラスに慣れ親しむことを目的とした講座です。

時間： 1限： 10:00~11:00

2限： 11:10~12:10



ベーシック・イングリッシュ

B. ステップアップ英語 Step Up English

- Step Up Englishは、英検準2級、2級を取得(見込みを含む)した受講生向けです。
- 欧米文化学科の学生は、入学後に選択して受講する科目「テスト・イングリッシュB」として1単位を認定します。(他学科の場合、単位は認定されませんが、受講は可能です)

時間： 1限： 9:00~10:30

2限： 10:40~12:10

(昼食をはさむ)

3限： 13:00~14:30

3) 場所： 聖学院大学

4) 受講料： 10,000円

振込み方法は、2013年聖学院大学入学前準備教育実施要綱(白の冊子)P.5「費用」を参照ください。

5) 申込方法：別紙申込書(入学前準備教育申込書)に必要事項をご記入の上、

同封の封筒またはFAXで送付ください。ホームページでも申込できます。
申込書受領後、受講証をお送りします。

6) 定員： 50名(English Time 35名、Step Up English 15名)

※定員になり次第、締め切らせていただきます。

7) 申込締切：2013年1月30日(水)

8) お問合せ先：聖学院大学 広報戦略室(入学前準備教育担当)

TEL: 048-780-1707 FAX: 048-725-6891 E-mail: jizen@seig.ac.jp

A. ベーシック・イングリッシュ

English Time

このクラスは、4月から聖学院大学で勉強をする英語のクラスに慣れ親しむことを目的としています。講座では、サンプル・レッスンをもとに、アクティビティーを取り入れて、課題に取り組みます。

1日目：「クラスメイトを知ろう！」コミュニケーション方法

Session 1: Get to know everyone better. Communication strategies

2日目：「サバイバル英語」海外旅行で必要最低限の英語を学ぶ

Session 2: Survival English. Survival skills while traveling abroad

3日目：「English through Songs」英語でアーティストや歌について学ぶ

Session 3: English through Songs. Learn about artists and songs using English

4日目：「英語で楽しく」楽しいアクティビティーで、英語を上達させる

Session 4: Fun with English. Improve your English through fun activities

5日目：「自然にコミュニケーション」友達やクラスメイトと英語を楽しく話す

Session 5: Communicate naturally: Enjoy speaking English with friends and classmates

B. ステップアップ英語

Step Up English

リスニング・スピーキング・リーディング・ライティングに役立つ基礎文法力アップの講座。

資格試験でスコアをアップしたい、または英語の4技能をもっとフルに活用したいと思っている人のために、短期間で集中して文法の見直しができる講座を用意しました。この講座は文法の説明だけでなく、短い会話を含めた口頭練習を取り混ぜて、より英語らしい英文の表現が出来るように、総合的な英語力アップを目指します。欧米文化学科で「英語強化プログラム」に参加したい人や、留学・資格試験の受検を考えている人には特にお勧めです。

1日目：よく間違えるbe動詞と一般動詞の違い、現在時制と現在進行形の違い

2日目：未来時制と過去時制を使って自分や周りの人について表現しよう

3日目：完了形っていつ使うの？微妙な気持ちを表す助動詞の使い方

4日目：会話に役立つ疑問文や否定文の作り方、受動態の見直し

5日目：資格英語テストに良く出る不定詞と動名詞の違い、奥の深い動詞の使い方、まとめ

受講生データ

1. 受講生データ
2. 面談記録
3. 各教科データ
4. クロージングアンケート結果

1. 2013年受講生データ

(1)試験別受講者数・実受講者数・受講率

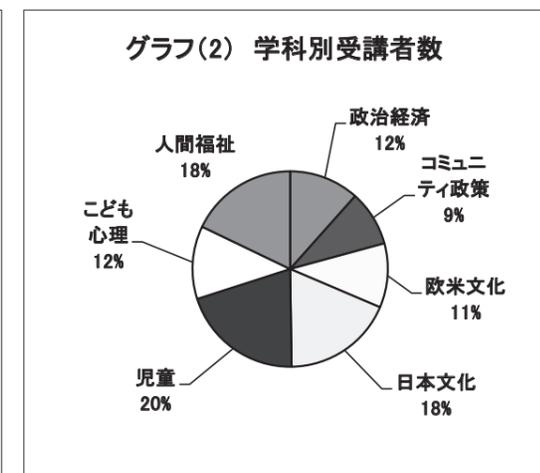
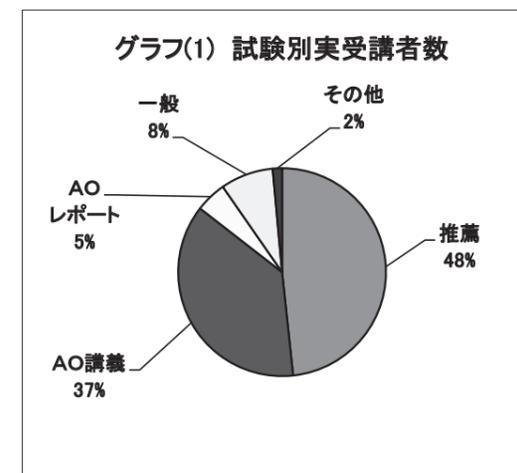
	英数国			英語集中			実受講者数	受講対象者	受講率
	2月	3月	小計	A	B	小計			
推薦	55	41	96	19	1	20	100	183	54.6%
AO講義	39	33	72	8	4	12	77	154	50.0%
AOレポート	4	6	10	3	1	4	10	15	66.7%
一般		17	17			0	17	78	21.8%
その他	1	2	3	0	1	1	3	8	37.5%
計	99	99	198	30	7	37	207	438	47.3%
2012年	115	84	199	66	4	70	226	468	48.3%

*その他は、自己推薦、AO英語特別入試など

(2)学科別受講者数・実受講者数・受講率

学科	英数国			英語集中			実受講者数	受講対象者	受講率
	2月	3月	小計	A	B	小計			
政治経済	10	13	23	4	0	4	24	71	33.8%
コミュニティ政策	8	11	19	2	0	2	19	42	45.2%
欧米文化	6	11	17	9	5	14	22	39	56.4%
日本文化	17	18	35	1	1	2	38	74	51.4%
児童	23	19	42	5	1	6	42	97	43.3%
こども心理	11	14	25	1	0	1	25	50	50.0%
人間福祉	24	13	37	8	0	8	37	65	56.9%
計	99	99	198	30	7	37	207	438	47.3%

*受講対象者は、推薦、AO、自己推薦、一般A、Bの入学手続者



2. 面談記録

入学前準備教育のスタッフが受講者一人ひとりと別紙アンケート（前ページ参照）を元に面談を行い、本人の希望、それに対するアドバイス、入学後の過ごし方を中心に話合った。面談後にスタッフの書いた記録より、一部を紹介する。（■以降は、学科、試験、性別）

■ 政治経済・指定校推薦・男

高校生のときに「社会」に疑問を持った。今は「世界の治安」に興味があり、そういった関係の講義を受けたい。イタリアのグルメ、歴史にも興味がある。

■ コミュニティ政策・指定校推薦・女

将来の夢は警察官になること。男性警官だと悩みなどを相談しにくいこともあるので、女性の味方になれると考えている。授業や友達を作ることに不安は特にはない。

■ 欧米文化・指定校推薦・男

中世ヨーロッパが好きで、キリスト教思想に興味を持った。自分の好きなことを教えたいと思ったのがきっかけで、教師を目指すようになった。

■ 日本文化・AO入試・女

歴史なら、どの範囲も好きなので研究したい。特に日本史の「高度経済成長」が好き。高校時代にバレーボール部に所属していたので、大学でも続けたいと思っている。積極的で話し好きな様子が伺える。

■ 児童・一般・男

小学校の教師になりたい。在学中に小学校教諭以外の資格も取りたいと考えている。海外ドラマを観てから英語にも興味を持つ。高校ではソフトテニス部の部長をしていたが、サークルに入るかどうかは悩み中。

■ こども心理・AO入試・女

高校の選択科目で福祉の授業があり、3年間取っていた。その福祉の先生が児童福祉施設に勤めていたので、それをきっかけに児童福祉に興味を持つようになった。カウンセラーと知り合い、児童に寄り添う関係に憧れている。

■ 人間福祉・一般・男

高校時代に書道をやっていた。大学の授業についていけるか心配している。高齢者福祉に関わる仕事をしたいと思っている。人の役に立てる社会福祉に関する仕事に興味を持っている。将来の夢は医療ソーシャルワーカー。

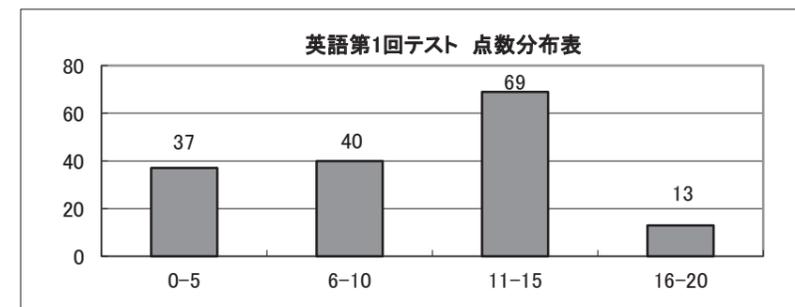
3. 各教科データ

英語テスト結果

講座内にて行われたテストの集計結果を掲載(2月・3月で同じテストを使用)

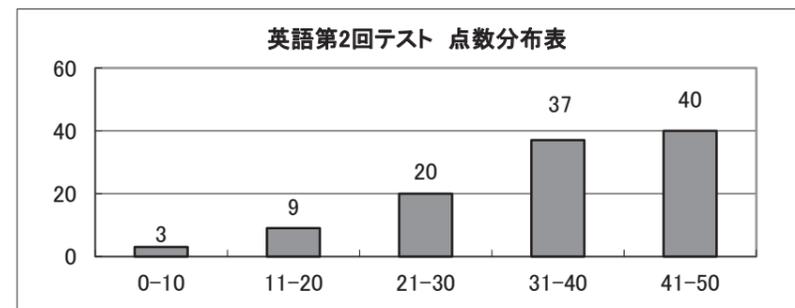
英語第1回テスト結果(20点満点)

	2月	3月	計
人数	86	73	159
平均点	9.4	9.9	9.6



英語第2回テスト結果(50点満点)

	2月	3月	計
人数	70	39	109
平均点	33.1	36.6	34.9

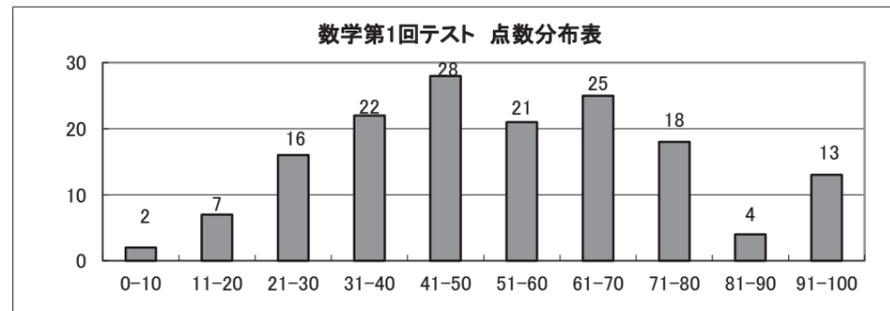


数学テスト結果

講座内にて行われたテストの集計結果を掲載(2月・3月で同じテストを使用)

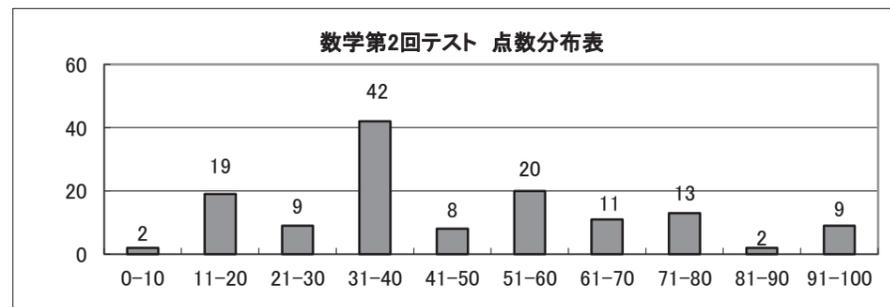
数学第1回テスト結果(100点満点)

	2月	3月	計
人数	84	72	156
平均点	57.9	52.7	55.3



数学第2回テスト結果(100点満点)

	2月	3月	計
人数	72	63	135
平均点	51.0	49.4	50.2



※国語小論文提出率、課題名については、実施の総括 文系国語表現力基礎に掲載。

4. クロージングアンケート結果

2月、3月講座最終日に受講生に記入してもらった、クロージングのアンケートより集計・分析をした。グラフは、2月、3月の合計数を元としている。

回答数

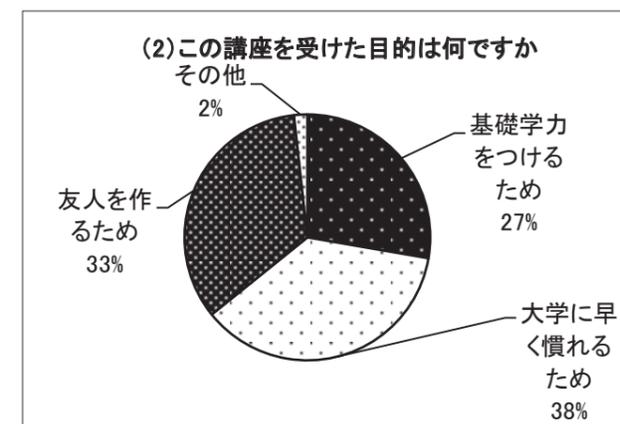
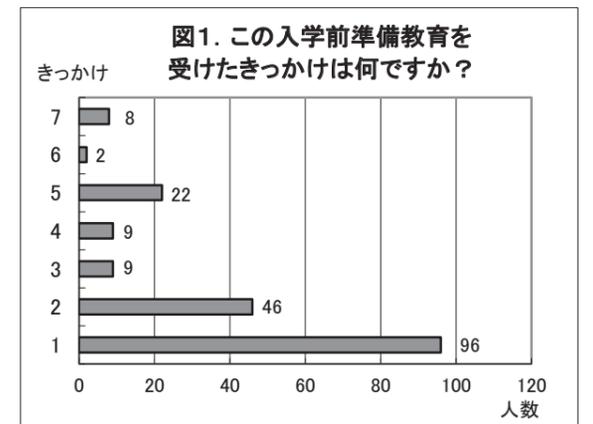
	回答数	受講者数	回答率
2月	72	99	73%
3月	64	99	65%
計	136	198	69%

(1)この入学前準備教育を受けたきっかけは何ですか？(複数回答可。表1、図1参照)

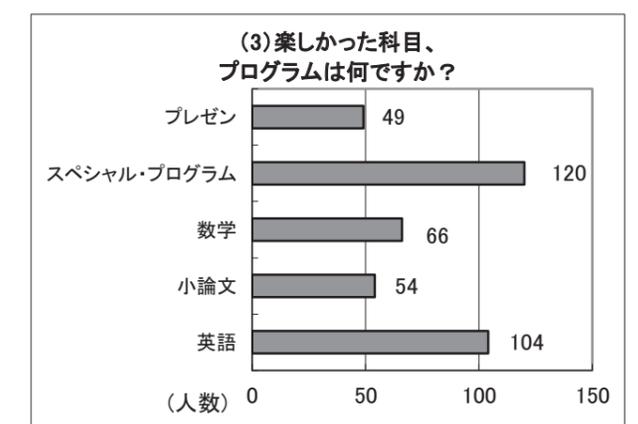
表1

きっかけ	2月	3月	合計
1 大学からの案内を見て自分で決めた	52	44	96
2 親に行くように勧められた	26	20	46
3 大学からの電話で勧められた	4	5	9
4 聖学院大学の入試で先生に勧められた	7	2	9
5 高校の先生に行くように勧められた	12	10	22
6 友達に誘われた	1	1	2
7 その他	3	5	8

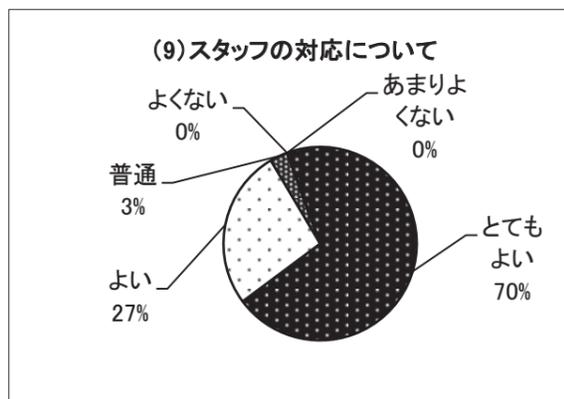
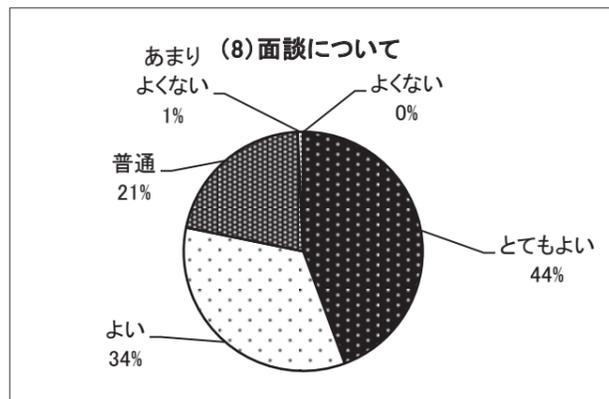
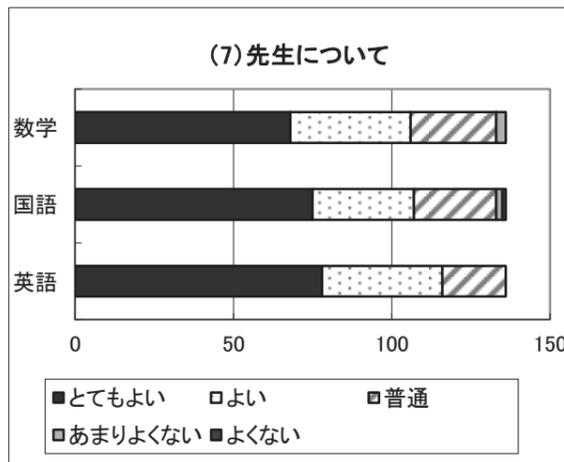
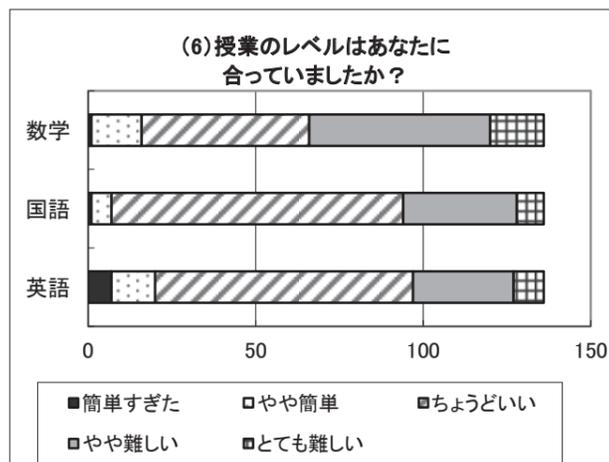
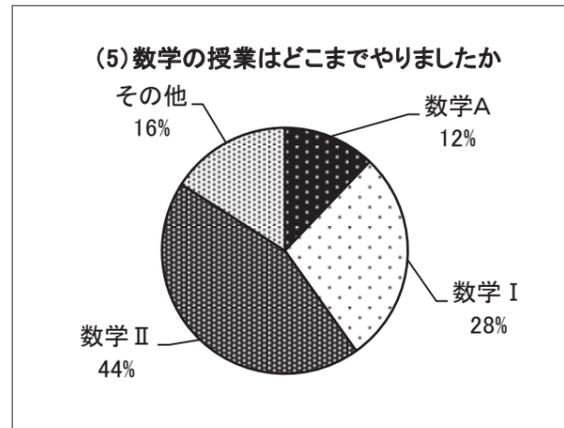
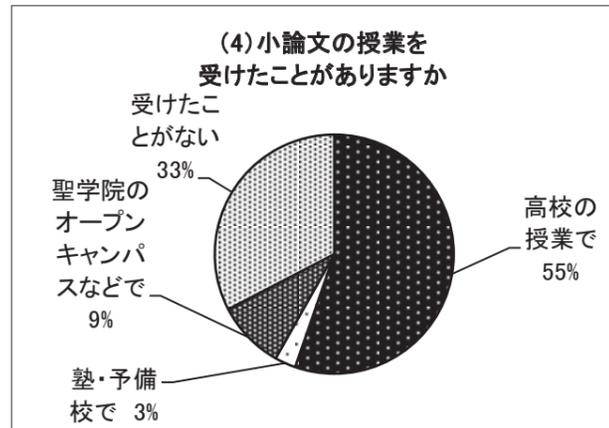
(人)



(複数回答可)



(複数回答可)



注：学生スタッフは総勢 10 名。1 年生から 3 年生までの学生が朝 8 時 30 分から夕方 5 時まで入学前準備教育スタッフとして、これにあたった。学生スタッフは小論文の添削や受講生のサポート、面談、スペシャル・プログラム運営サポートなども行った。

(10) 自由回答欄より

同じくクロージングアンケートの自由記入欄より転載する。同じような意見は集約した。

授業の良かった点など

- 親身になって、色々指導してくださって、ありがとうございました。高校の授業の復習や、新しい知識の獲得になったので、とても良かったと思います。
- 1つ1つの基礎を教えて頂きありがとうございました。“先生と生徒の距離が近い”ということを改めて感じる事ができました。大学生活が楽しみです。
- 英語や数学は苦手だったけど、授業はとても楽しかったです。自主的に楽しく勉強ができるような気がしました。
- 準備教育に参加して良かったです。授業もとても分かりやすく、忘れていた内容もあったので、また理解を深めることが出来たので良かったです。
- 色々な事を教えていただきありがとうございます。小論文添削での先生やスタッフのコメントやメッセージはとても心に残りました。
- 楽しかった。小論文のコメントを読むのも楽しかったし、授業も印象に残った。国語の先生の認識のズレや、英語の先生の辞書の話が特に楽しかったです。
- 小論文の評価も、先輩方が沢山のコメントをくださったので、苦手な作文にも、一生懸命に取り組みました。

スペシャル・プログラム カタリバの良かった点、楽しかった点など

- カタリバのおかげでたくさん友達ができたので良かったです。その後の授業もとても楽しくなったので、やっぱり友達が必要だなと感じました。
- カタリバをやってみて、いろんな人と交流することができました。
- カタリバは大変でした…。でも頑張って話したりして、楽しかったです。大学に向けて良い経験になりました。
- カタリバが1番楽しかったです。入学前に男子と女子の友達が増えました。やったぜ！
- ただ授業を受けるだけではなく、カタリバで仲良い友達もたくさん出来て楽しい11日間でした。

学生スタッフについて

- 学生スタッフの皆さんが、本当に優しく、気にかけてくれているのが伝わってきて、嬉しかったです。
- 楽しんで授業を受けることができたのは先輩方のおかげです。ありがとうございました。
- 面談で先輩と進路について話せてよかったです。大学の授業時間にだいぶ慣れてきました。
- 同じ学科の先輩と話せて良かったです。もっと話す機会があったらいいなと思っています。
- 最初は行くのが不安だったのですが、スタッフの方が面談等をやってくれたおかげで楽しかったです。

入学前準備教育を通しての感想

- 大学の雰囲気や先生、同級生がわかり入学してからの不安が無くなった。先生の授業も面白くなるような工夫がしてあり、楽しく臨むことが出来ました。
- 友達ができたので安心しました。スタッフの人も先生もおもしろくて入学するのが楽しみです。
- とても人見知りで、これからの大学生活に大きな不安がありました。講座も受けるか受けないかとても迷ったのですが、実際に講座を終えて、参加して本当によかったなと思っています。学生スタッフの先輩が色々サポートしてくださり、沢山話しかけてくださった事が、心の支えになりました。
- 授業が楽しかったです。友達も出来たし、先輩たちとも親しくなれたので参加してよかったです。私も入学後は、学生スタッフなどやってみたいなと思いました。
- 友達ができて本当によかった。先輩とも仲良くなれたし、めちゃくちゃ楽しかった。
- 大学に慣れる為に来ましたが、大学生活への心構えが出来、大学で勉強をしたいという気持ちが強まりました。先生の授業も分かりやすく、為になりました。スタッフの方々も親切でこの方達が先輩だと、とても頼もしいと思いました。面談をして下さった先輩も親しみやすかったです。早く大学で勉強したいです。
- 楽しかった。もっと長くやりたかった。友人ができた。
- 授業を楽しく受けることができて、とても良かったです。友達も作ることが出来て、90分の授業にも慣れました。入学前に、先輩とも話せたりできたので、参加して良かったと思っています。

スペシャル・プログラム報告

1. NPO カタリバ 報告

2. プレゼンテーション例

3. 就活 News Navi 報告



1. スペシャル・プログラム「カタリバ」報告

2月8日(金)、3月8日(金)、高校生を対象としたキャリア教育プログラムを行うNPO法人「カタリバ」をお招きし、大学生と新入生が一日ゲームや話し合いを通して、これからの大学生活を考えた。

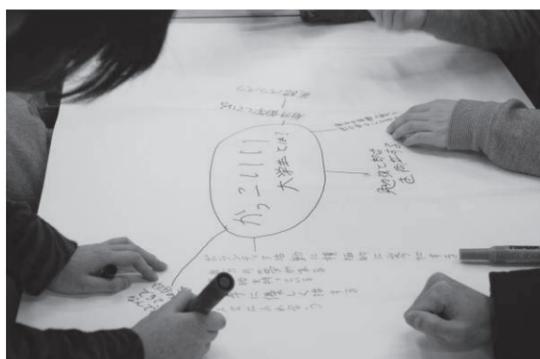
入学前準備教育2月講座、3月講座で行われたこのプログラムでは、本学の学生を含む、カタリバのキャストと呼ばれる学生スタッフと受講生が「かっこいい大学生とは？」をテーマに話し合い、発表を行った。また、講座最終日3月26日(火)には、受講生一人ひとりがプレゼンテーションを行い、受講生自身が考える「かっこいい大学生像」を発表した。



ワークシートを使いながら、キャストと受講生が高校生活や、なりたい自分像を話し合う「座談会」



キャストが進路や友人関係、学生になって取り組んだことなどをプレゼンテーションする「先輩の話」



模造紙に書き込みながら「かっこいい大学生とは？」について話し合う



班ごとに話し合った「かっこいい大学生とは？」について発表

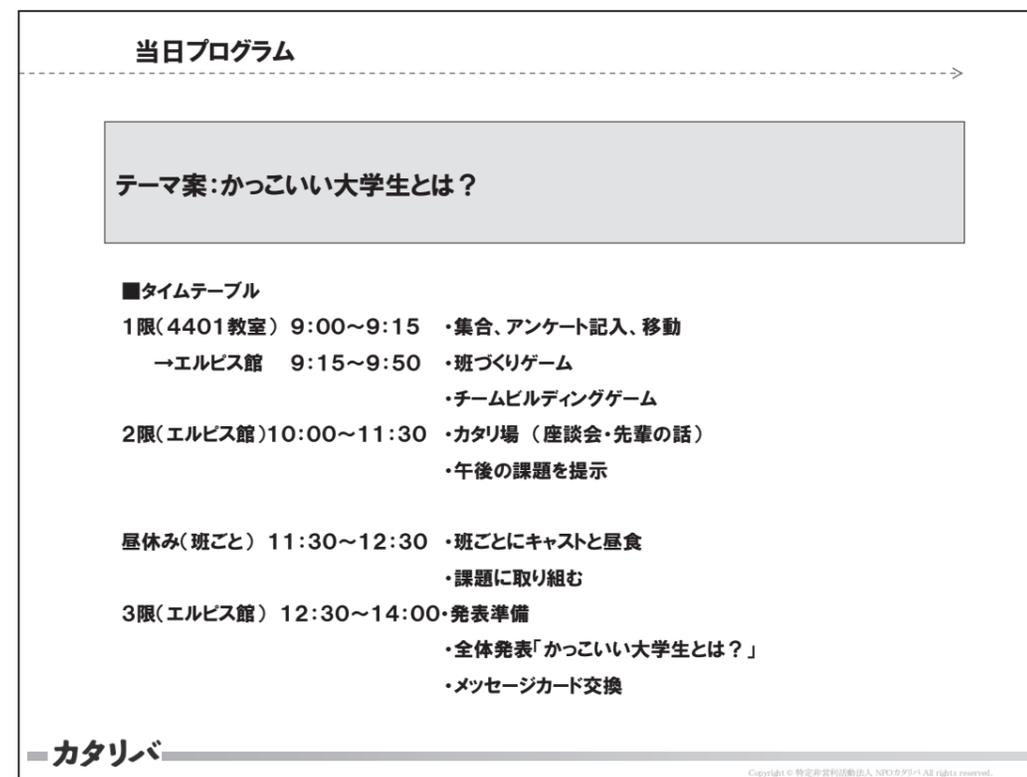
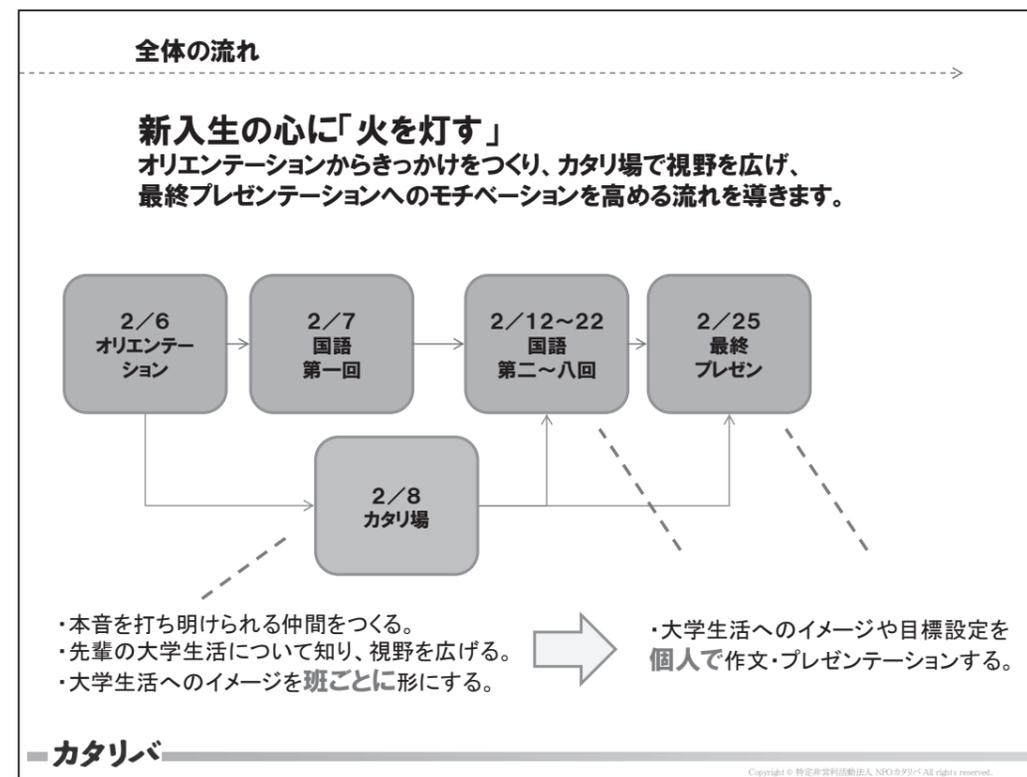


カタリ場を通して考えたこと、決意したことを「約束カード」に書き込む

●特定非営利活動法人 NPO カタリバ
 カタリバは代表者今村久美により、2001年に設立された高校生を対象としたキャリア学習プログラムを行う教育系NPO法人。主な活動地域は首都圏・関西圏・沖縄県・青森県・愛媛県・北海道。
 親や先生などのタテの関係でもなく、クラスメートとのヨコの関係でもない、「ナナメの関係」である少し年上の大学生たちを主なスタッフとして活動している。「座談会」→「先輩の話」→「約束」という流れで成り立つ対話型ワークショップを通じて“自己理解”や“意欲”を引き出す。

<全体の流れ・当日プログラム>

開催にあたり、入学前準備教育初日オリエンテーションにて、カタリ場事業部長 今村亮氏が来訪し、カタリ場について説明された。また、国語の授業第6講で取り組む小論文課題「大学で学びたいこと」では、カタリ場で話し合った高校時代の振り返りを活用して小論文を作成、プレゼンテーションへの土台作りとした。新入生のモチベーションを高めるこのプロセスは3月講座も踏襲した。



<学生スタッフ・受講生感想>

1. 学生スタッフ

カタリ場では、キャストと呼ばれる研修を受けた学生スタッフが主体となり、プログラムを進行、受講生をフォローした。本学の学生スタッフも1月より大学とカタリバ本部(高円寺)で行われた研修を受け、キャストとして参加した。入学前準備教育に参加したキャストは、本学の学生とカタリバからの学生(他大学学生)による混成。

※希望する本学学生スタッフは、入学前準備教育での経験を生かし、引き続き埼玉・東京の高校で行われるカタリ場イベントにキャストとして参加予定。

2. 振り返り

カタリ場終了後には、司会進行を務めたカタリ場事業部事業部長 今村亮氏とキャストの学生スタッフによる振り返りが行われた。主にカタリ場開催後のアフターフォローについて話し合われた。以下にその中で出た意見の一部を紹介する。

- ・高校時代の振り返りや、大学生活で挑戦したいこと、「かっこいい大学生とは？」といった自分自身について考える作業を続けていくことが大切。そのために、入学前準備教育の通常授業でも受講生へ声かけが必要ではないだろうか。
- ・受講生自身がカタリ場で語った夢と、現実との差を感じる時がやってきた時に、学生スタッフがフォローできないだろうか。
- ・アウトプットを苦手とする受講生(自分から意見を言ったり、話しをすることが難しい受講生)をもっとフォローできないだろうか。そういった受講生へ今まで以上に学生スタッフが声かけや、友だちの輪を広げていく手伝いをしていくべきではないだろうか。
- ・学生スタッフはもっと受講生に近づけるのではないだろうか。
- ・全員が一つの部屋で盛り上がるカタリバの雰囲気馴染めない受講生への配慮が必要ではないか。もっと受講生と関わりを持っていくことが大切だと思う。

3. 開催後に行ったアンケート調査から感想を一部紹介する

- ・自分の目標が見えた。やる気がとても出た。
- ・とても楽しかった。話を聞いてこの大学で良かったと思った。
- ・新しい友人ができた。先輩の本音トークはすごく良かったです。
- ・先輩たちのおかげで目標が固まったり、視野を広げることができました。
- ・人と触れ合うことが楽しいという事に気付かせてくれました。4月からの不安も大分和らいだ。
- ・班分けや班での発表が特に面白かったです。大学の先輩の話も勉強になりました。また聞きたいです。
- ・先輩方のお話を聞いて、目標に向かって頑張りたいと思った。
- ・大学に入ったら何をしようか、少しずつですが見えてきました。
- ・先輩たちが思っていた以上に気さくで、事あるごとに声をかけてくれたり、色々な質問に答えて下さって、本当にありがとうございました。誓った約束を胸に大学生活を送りたいです。

プレスリリース

2013年3月1日

聖学院大学

広報局長 山下 研一

〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号

聖学院大学 入学前準備教育講座、3月6日よりスタート。 特別プログラム、NPOカタリバの「カタリ場」により 学ぶ意欲を高め、友だちづくりを支援します

聖学院大学(埼玉県上尾市・学長 阿久戸光晴)では、すでに入学手続きを終えた2013年度入学予定者(希望者)を対象として、「入学前準備教育」(<http://www.seigakuin.jp/admission/jizen/>)を実施しています。大学に必要な基礎学力を確認、補うことを目的とする特別授業で、今年ですでに13年目を迎えます。英語・数学・小論文を、11日間という長い期間を大学に通学して学習します。本講座はキャンパスに親しみ、友だちを作ることで、不安なく大学生活が送れるということによる離学者対策、基礎学力を確認することによる早期就職対策にもなっています。

3月8日(金)には、特別プログラムとして、特定非営利活動法人NPOカタリバが行うキャリア学習プログラム「カタリ場」を実施いたします。「カタリ場」では、学生スタッフが先輩として参加することで、これから始まる大学生活上の目標やテーマを意識、設定してもらうことを目的としており、「カタリ場」以降の授業(小論文、プレゼンテーション)でも、再確認をしていくことで、学ぶ意欲を高めていきます。またプログラムを通じての、友だちづくりも支援します。

【入学前準備教育講座3月講座 実施日】(11日間)

3月6日(水)~8日(金)、11日(月)、14日(木)、18日(月)、19日(火)、21(木)、22日(金)、25日(月)、26日(火)

【実施科目】小論文、英語、数学 ※取材のための見学も可能です(要予約)

【受講者数】3月の受講者は約100名の予定(2月の受講者は99名)

【カタリ場プログラム】 3月8日(金) 9:30-14:00 於 エルピスホール

- ◆班づくりゲーム(共通点を探してグループをつくるワーク)
- ◆チームビルディングゲーム(班対抗で競うゲーム)
- ◆カタリ場(座談会、先輩の話を聞く)
- ◆班ごとでのプレゼンテーション:テーマ「かっこいい大学生とは?」(班のメンバーと昼食をとりながら発表の準備、みんなの前での発表)
- ◆大学4年間をどう過ごすべきかをそれぞれ考えて、個人ごとに「約束カード」を記入

■聖学院大学(学長:阿久戸光晴 住所:埼玉県上尾市戸崎1番1号) <http://www.seigakuin.jp>
1988年設立。大学は3学部7学科(政治経済/コミュニティ政策/欧米文化/日本文化/児童/こども心理/人間福祉)のほか、大学院、総合研究所を有する。

【取材のお問い合わせ】 聖学院大学広報戦略室

電話(ダイヤルイン) 048-780-1707 FAX 048-725-6891

E-mail pr@seig.ac.jp

2. プレゼンテーション例

2、3月講座最終日、プレゼンテーションとしてOHPを利用し、自己紹介を行った。プレゼンテーションでは、スペシャル・プログラム「カタリバ」で受講生同士が話し合った「かっこいい大学生とは？」についてそれぞれが発表した。以下に作例を掲載。発表者氏名、高校等、個人情報に関わる部分はマスキングをしている。

※2月講座受講生は大雪のため授業が一日中止となったため、補講として3月講座受講生と合同で発表を行った。
(■以降は、学科、試験、性別)

■ コミュニティ政策・推薦・男

■ 欧米文化・AO・女

<p>ぶれぜんてーしょん</p> <p>政治経済学部 コミュニティ政策学科</p>	<p>PRESENTATION</p> <p>人文学部 欧米文化学科</p>
<p>自己紹介</p> <p>カラオケ、ボーリング、サッカー</p>	<p>自己紹介</p> <p>名前 出身 趣味 読書・ゲーム</p>
<p>地元紹介</p> <p>千葉県 柏市</p> <p>有名なもの ・柏レイソル、ジェフユナイテッド千葉 ・柏祭り ・かしわ餅</p>	<p>地元紹介</p> <p>埼玉県 川口市 ・銚子の町 ・駅周辺が便利</p>
<p>大学でやりたいこと</p> <p>・資格をとる！ ・政治について学ぶ！ ・サークルに入る！</p>	<p>学びたいこと やりたいこと</p> <p>言語 留学 コミュニケーション</p>
<p>なりたい大学生</p> <p>何事も 楽しむ！</p>	<p>私が思う カッコイイ大学生</p> <p>夢・目標を持って 頑張っている人</p>

■ 日本文化・推薦・男

■ 児童・一般・女

<p>Presentation</p> <p>人文学部 日本文化学科</p>	<p>プレゼンテーション</p> <p>人間福祉学部 児童学科</p>
<p>出身校</p> <p>部活 演劇部</p> <p>趣味 ゲーム</p>	<p>自己紹介</p> <p>出身校 部活 書道部 趣味 音楽を聴く、マンガを読む</p>
<p>東京都 北区</p> <p>内田康夫 北西ヶ原出身</p> <p>清野とおる 赤羽独特の雰囲気。</p>	<p>郷土紹介</p> <p>栃木県宇都宮市 有名「ギョウザ」「ジャズ」 市の花: サツキ 市の木: イチョウ</p>
<p>大学でやりたいこと。</p> <p>演劇部</p> <p>それと、勉強と遊び。</p>	<p>大学でやりたい事</p> <p>・資格を取得する ・書道を極める</p> <p>夢</p>
<p>かっこいい大学生</p> <p>限られた時間を 目標のために 費やせる人。</p> <p>かっこいい大学生を目指して…… ゲームは、 ちょっとだけ我慢。</p>	<p>かっこいい大学生とは？</p> <p>積極的に何にでも全力で取り組む ・自分の意志がはっきりしている こうなるためには…… 自分に自信を持つ!!</p>

3. 就活 NewsNavi 報告

就活 NewsNavi は、2011 年度より始まった共同通信社が配信するインターネットで読むことのできる就活生向け（学生向け）のニュースサービスで、業界研究、企業研究など就職活動に直結するニュースを紹介している。聖学院大学でも、在校生向けに 2011 年度から導入している。今回初めて入学前準備教育受講生を対象に導入し、講義でも活用した。



ガイダンスの様子



受講生はインターネットからパソコンを使って登録。学生スタッフが登録のサポートをした

①ガイダンス・登録

2 月講座、3 月講座初日には、ニュースを読む習慣づけをするために、就活 NewsNavi 活用ガイダンスを開催。共同通信社よりデジタル推進局デジタルサービス部次長 浜村寿紀氏をお招きし、登録や活用方法について話していただいた。その後、受講生は個別に登録作業を行った。

②就活 NewsNavi の活用

国語の授業第 5 講で行われた小論文課題「日本社会を考える」では、新聞やニュースなどから受講生自身が記事を選び、要約・考察を交えた課題作成が行われた。課題作成には新聞記事のほかに、就活 NewsNavi を使って記事を選び、小論文作成に結びつけた。

なお、就活 NewsNavi はスマートフォンから閲覧することができ、多くの受講生はスマートフォンを使って、記事を検索した。

※就活 NewsNavi は登録制となっており、本学の学生であれば大学入学後に無料で使うことができる。

※次ページより、ガイダンスの際に配布された就活 NewsNavi 活用法レジュメを掲載する。

聖学院大学入学予定者のみなさん

就活 NewsNavi 活用法

2013 年 2 月・3 月

「入学する前から就職活動の話なの？そんな先のことと言われてもなあ…」。

みなさんからそんな声が聞こえてきそうです。たしかにそう感じるのも無理はないですね。でも、こんな風に考えてみてはどうでしょうか。

実は就活って特別なことではありません。みなさんが大学生活で積み重ねてきたことを面接でちゃんと話せば、それで大丈夫なんです。ですから、ぜひ、1、2 年生のうちから社会のこと、経済のこと、業界のこと、企業のこと、働くということを少しずつでいいので考えてみてください。

就活 NewsNavi には世界と日本のありとあらゆることに関するニュースが詰まっています。共同通信社という全国の新聞社、放送局にニュースを送っている報道機関の提供です。情報とは「生きていく力」の基となるものです。このサービスを活用して、みなさんが視野を広げてくださればと願っています。

就活 NewsNavi 編集部一同

【小論文での活用法】

(1)「共同トピックス」

今、世の中で問題、話題になっている事項を取り上げて徹底解説しています。小論文のテーマに関連しているタイトルがきっとあります。そこに載っている記事を読みながら自分の考えをまとめてください。



(2) 記事検索機能



就活 NewsNavi に収容された膨大な情報（ニュースソース＝共同通信、週刊ダイヤモンド）に加え、共同通信が過去 6 年間に配信したすべての記事をキーワード検索することができます。分からない言葉があれば、こちらで検索して調べてみてください。

【就活 NewsNavi の歩き方】

(1) 「厳選ニュース」

前日のトップニュース10数本を厳選して毎朝午前6時に配信します。就活生なら知っておいてほしいニュースばかりです。毎日これを読む習慣をつけてください。知らず知らずのうちに、あなたの社会人基礎力がアップします。

(2) 「業界研究」

さまざまな業界を約80に区分して専用ページを作りました。まず、業界名の一覧に目を通してください。気になった業界の専用ページを読み込んでください。自動更新の最新ニュースもお見逃しなく。

(3) 「企業研究」

主要企業1400社以上の専用ページをつくりました。内容は随時、バージョンアップされます。自動更新の最新ニュースは面接前に必ず目を通してください。

(4) 「キャリア研究」

働き方、生き方に関する記事を集めたページです。毎日更新。じっくり読んで職業観を養ってください。

(5) 「ブリーフケース」

気になる記事を保存できるデジタルスクラップ帳です。自由にフォルダを作成してテーマ別に記事を整理できます。また記事ごとにメモを書いて保存することもできます。

(6) 「共同トピックス」

今という時代を理解するための最重要テーマを選び、徹底解説しています。記事を読んでいて「分かりにくい」と感じたらこのページに。「内定応援カフェ@汐留」「就活リンク集」「仕事サプリ」など、会社選びから面接突破法まで、あなたの就活生活に役立つコンテンツも多数掲載されています。

(7) メールマガジン

毎週金曜日に、就活関係の情報を満載したメールマガジンを配信します。

実施の総括・実作例

1. 講師紹介
2. 実施の総括（英国数）
3. 小論文実作・添削例



講師紹介

上嶋 康道 (基礎英語)

聖学院大学政治経済学部コミュニティ政策学科非常勤講師。

入学前準備教育で、長く基礎英語を担当。埼玉県内の中高一貫校でも英語を担当している。予備校では20年の英語指導経験がある。都内複数私立高校での国語特別授業や、高等学校国語教科書の指導書（筑摩書房）の執筆経験もあり。

高島 慎一 (基礎英語)

予備校教師として小論文・英語・世界史を教える。都内私立高校を中心に課外講師としても活躍。また、関東近郊公立高校・私立高校で大学進学講演を多数担当。入試問題の分析に通じており、多くの受験生を第一志望の大学に合格させている。

※高島講師は基礎英語の一部を担当

岡田 安司 (基礎数学完成)

京都府出身。一橋大学法学部卒。大学受験予備校講師として数学・現代文・古文などをマルチに教える経歴を持つ。大人数の授業はもとより、一人ひとりの学力レベルに合わせた面倒見のよい指導で人気がある。

大槻 岳 (文系国語表現力基礎)

聖学院大学政治経済学部コミュニティ政策学科非常勤講師。

帝京大学非常勤講師。日本リメディアル教育会会員。社団法人全国学力研究会評議員。ティーオー（株）代表取締役。

大手予備校ではセンター・国公立難関私大の模試作成や解答速報も担当。入試問題を出題者・採点者の「眼」から切り出す鋭い解説に加え、テンポと間を重視したメリハリのある授業内容は多くの生徒から絶大な支持を得ている。

また、首都圏各高等学校を中心に、大学進学講演・小論文講演・教員対象研修を年間50回以上行っている。

受講生は高校生だけにとどまらず、非常勤講師として大学でもキャリア教育の講座を持つと同時に、オープンキャンパスの講師を始め、入学前準備教育などの依頼も多く、春期には複数の大学で文章力講座を実施。特に、聖学院大学での入学前準備教育は、担当講師として朝日、読売、毎日の三大紙の紙面を飾るなど注目度は高い。

1. 基礎英語

基礎英語担当 上嶋康道

《基礎英語の目標について》

本年も、授業の目標を参加者が英語に抱いている苦手意識を緩和することにおいた。

現行教育システムの中で生徒がふれる英語には、教科課程である以上、成績評価が必要となる。そして成績評価には、通常、試験が行われる。その試験は、採点の公平性・容易性その他の理由から、周囲からの援助が期待できない環境で実施される。現実の英語運用場面では辞書やインターネットの利用は可能であるにもかかわらず、試験においてはその利用が認められない。したがって、試験でよい点を取ろうと思えば暗記へのプレッシャーは強くなる。覚えなければならないという恐怖心にも似た感情が、新しいことを学ぼうことにプラスに働くのは難しい。それが自己の生命に関わるような必要性を見出せないような場合はなおさらである。英語嫌いとなる原因の大きな理由と思われる。以上の問題意識から、特に最初の授業では「間違いをすることに過剰な恐怖心を抱いてはいけないこと」を強調している。

とはいえ、生徒たちが入学後授業についていけるか不安を抱いている以上、それに応えなければならない。そこで基礎知識の確認は引き続き重視した。受講者の中には実質的には英語から何年も遠ざかっている者も多いからである。

《内容について》

点数を取るための学習からの脱却という目標のために、多様な英語とのふれあい、とくに音声面での英語体験を重視している。ことばを学ぶのに音はきわめて重要な要素である。しかし、学校教育はもちろん塾予備校でもその点はなかなか手が回っていないのが現状である。前述のとおり、単位の認定を伴う正規の授業で教えようとする場合、試験による定着度の確認が必要になる。ところが、音声学習と試験は相性が良いとは言えない。準備教育の基礎英語では単位が認定されない。受講生は熱心に取り組んでいるので少々残念なことである。しかし、だからこそ、通常ではスキップされがちな部分を丁寧に指導できるというメリットもある。英語習熟度のばらつきが尋常ではないほど大きい読解より、音声面の授業のほうが好都合という事情もある。加えて、文法・読解の英語が不得意な受講者が、発音聞き取りでは短期間でめざましい向上を示すことが珍しくない。

以上のような背景で、発音と聴き取りのポイントを強調している。2010年からはフォニックスの要素も取り入れている。このあたりの基礎的なところまで戻って話をする方が有効なようである。綴りと実際の音声とのずれについては例年通り今年も力を入れた。受講者の反応も良好であった。

《受講生の印象》

昨年同様3月講座出席者に元気があった。今年も出席状況はよかった。

残念ながら例年通り、現時点での英語力という点では厳しい評価をせざるを得ない。beに続けて動詞の原形を書いてしまうなど、基本的な誤りが目立つ。これはここ数年顕著となっている。もちろん、聖学院大学に特有の現象ではない。このようないわゆる学力低下については時折メディアで面白半分に取り上げられることもあるが、教員が評論家になってはどのようなでもない。どうやれば困っている者——目の前にいるリアルな存在——の力になれるかを考えることが重要である。

ただ、机間を巡視しつつ助言をすると自ら修正できることが多い。やはり授業時間数の絶対的不足など環境要因は小さくないだろう。もちろん、指導要領が変わってどうなるかは一定期間経てみないとわからない。

《来年度に向けて》

引き続き受講生が自ら学ぶことの出来るカリキュラムの工夫が今後の課題である。新聞記事などホットな素材を使うことも検討したい。

(1)本講座のカリキュラムと学生の印象について

2007年より基礎英語の一部を担当させていただいております。

日本人の英語の運用能力について、私たち自身が何とかしなければならないと感じている中、特に多くの学生が、大学進学という新たなスタート地点に立つにあたって、英語学習について期待と不安とを覚えているのではないかと思います。書店を覗けば「語学」のコーナーには様々な学習書や英語教材が溢れており、「はじめからやり直す」材料には事欠かない現状にあります。また、i-pod やスマートフォンが普及したことによって、listening の教材等が利用しやすい環境になってきています。しかし、そうしたツールが充実する一方で、どのような学習方法や教材を選択すればよいのか、自分で判断して決定することが難しい状況にあります。特に本講座を受講する学生は、英語そのものに苦手意識を持ちながらも「何とかしたい」という真摯さを持っているため、何から手をつければよいのか知りたいという思いを持っています。

入学前準備教育は、英語の学習を得る機会であると同時に、巷に溢れている様々な学習手段にどのように接していけばよいのか、何を基準に自分に合った学習方法の選択をすれば良いのか、アドバイスを受けることができる機会でもあります。実際、本講座の受講生は、大学進学にあたって「英語の苦手意識を払拭したい」「英語の勉強をどのように進めていけばよいのかを知りたい」という意識を持って講座に参加しており、勉強法の話の際については注意深く耳を傾けていました。

これまで数年に渡って、本講座を受講する学生の様子を見ていて、それぞれが持っている目標としては改めて以下のようなものなのではないかと思えます。

- ①英字新聞等を独力で読めるようになること
- ②英会話力の向上
- ③英検等の資格取得

よって、本年もこの3点を考え、カリキュラムを進めていきました。③は①と②の学習で培ったものを形にするものです。③に特化してしまうと「入学前準備教育」の趣旨からはやや離れてしまいますので、学生の英語意識の苦手払拭のためにも、①と②に重点を置いて講義を行いました。

全9回で英語のすべてを網羅することは不可能です。冒頭にも掲げたように、講座終了後は受講生自身が様々な学習手段を選択し、自力で英語学習を継続できるように、授業内では今後取り組むべき「英語学習とは何か」を示しながら「学習範囲の全体を見せる」講座を展開しています。

基礎英語を担当させていただくようになってから感じたことは、学生の「文法知識の少なさ」です。外国語である英語を話すにしても、読むにしても、最低限の「書く、読む、話すための

ルール」である「英文法」の知識を持つことは必須となります。

現在、高校の英語授業について、日本語を使用せず英語で授業を行うカリキュラムが導入されつつあります。そうした授業においては、例えば、三人称単数現在でつけられる”s”にこだわる必要はなく、文法にとらわれずに会話を進めていくべきだという意見も、教員間の研究会では提案されているようです。確かに、正確な英語で発言することにこだわるあまり、細かいミスを恐れて英語で表現することに二の足を踏んでしまつては、貴重なコミュニケーションの機会を失うことになりかねません。ただ、相手に理解してもらおう表現にするためには、最低限守らなければいけないルールもあります。それこそが文法であるとも言えます。

そこで、2011年のテキストより「動詞」を中心に極めて基礎的な文法の必要項目について扱うカリキュラムを9回中約2回分、テキストに取り入れております。文法偏重の学習は「英語嫌い」を促進させてしまいますが、英語でコミュニケーションをするには最低限守るべきルール（文法）があり、そのルールを学ぶことも重要であるということを知ってもらえればと考えています。

多くの学生は「英語を使ってコミュニケーション」できるようになることを望んでいます。しかし、英語ではどのように表現するのか、十分に知らないため「話したくても話すことができない」状況にあります。挨拶表現をはじめ日常会話レベルであっても、基礎的なフレーズを知らないまま会話の中に放り込まれては、言いたいことはあっても表現する術がないため、沈黙せざるを得なくなってしまう。

そこで、昨年より第1回の授業では、「英語の自己紹介文」の「サンプル文」を配布しました。これは、自己紹介の定型表現で成り立つもので、氏名・住所・趣味など自身の情報について話すところは空欄にしてあります。各自、書き込んでもらった上で、数分かけてサンプル文全体をなるべく覚えてもらうようにしました。その上で、英語が苦手な人は、サンプル文を見ながらも良いのであるという条件も設定しつつ、机を同じにする隣席の学生同士、英文を使って自己紹介しあう時間を設けました。発音のおかしさや、言い間違いは気にせず、できる限り相手の目を見ながら伝え合うことをアドバイスしましたが、昨年同様に大きな盛り上がりを見せました。英語を使って表現することのきっかけになったのではないかと思います。

既に身につけている日本語とは違い、外国語である英語で会話を行う場合、基本フレーズを習得していることが前提となります。今後も、こうした「会話表現」を紹介する機会をできる限り設けていきたいと思えます。

(2)授業内容について

①リスニングについて

高校の定期テスト、実力テスト、さらには入試のための英語の勉強といった「点数をとるための英語学習」は「机に向かって」行うものが中心です。また、今後も英検、TOEIC に向けた対策のための勉強を行うには、そうした「机に向かって」集中して取り組むことも必要です。

しかし、そうした勉強だけが「英語の勉強」ではありません。身のまわりにある CD、i-pod

や DVD、最近ではスマートフォンを活用して「楽しみながら」英語に慣れ親しんでいく勉強方法もあります。大学以降の英語学習においては、「楽しみながら」取り組み、英語に触れることを日常生活の一部にしていくことが望ましいと思います。

そこで本講座では、映画を活用して英語に慣れ親しんでいく勉強を紹介しております。英語を勉強することで「字幕なしで映画を楽しめるようになりたい」と考えている学生も多くいます。ただ、いきなり字幕なしで映画を見ている、特にドラマがメインのものはセリフが重要になってきますから難しいです。

そこで、まずは、自分の好きな映画から始めていくことを提案、紹介しました。自分が好きな映画の中でも、お気に入りのシーンについて、セリフを「シャドーイング」していく方法です。シャドーイングとは、英文を見ずに英語の音だけを聞いて、聞えるそばから声に出していく方法です。聞えた音を自分なりに聞えた通りに声に出すことです。英語を学習していると、英語を全部聞きとることや、上手に発音することに拘ってしまいます。そこで、英語で何と言っているのか理解するのは後まわしにして、まずは、ぶつぶつと小さな声でもかまいませんから、途切れず声に出してみることからでも良いので、恥ずかしがらずに自分で「発声する」勉強を重視することをアドバイスしました。

次に、自分が発声してみたところを聞きとって、紙に書き出していくと、自分が発声したセリフが身につきますし、どのような英文なのか、理解も深まります。こうした「ディクテーション」に取り組むことを紹介しました。ふだんの学習では、単語1つから始めることからでも十分効果があります。

今回の講座では、大教室での授業ですので、シャドーイングは紹介にとどめて、「ディクテーション」を中心とした勉強を進めました。

授業では映画を使いながら「ディクテーション」を行いました。いきなり最初からセリフ全部を書きとるのは難しいです。そこで、重要箇所を空欄にしたスクリプトを配布し、映画を観た上で、次にセリフに注目しながら書きとりを行う授業を実施しました。こうした学習法を自学自習の中でも取り入れてもらえればと思います。

こうしたリスニングについても扱う一方で、授業では2~3回に渡って発音・アクセントも扱っております。日本人にとって難しい発声の代表格ともいえる”l”と”r”や”v”と”b”等を始めとした発声や母音の発声について、発音記号の特徴とともに解説しました。こうした発音を学ぶことにより、この言葉はどのように発声するのかという視点を持つようになり、そこからさらにリスニングにおいても関心を持って発音を聞くようになり、リスニング力も増強されます。授業内では受講生一人ひとりに発声してもらい、耳と口の両方を使って取り組んでもらいました。「楽しく」学ぶことで英語の苦手意識を払拭する機会にもなったと思います。

②リーディング

日本語と構造が異なる英語に接するに当たって「英文法」を学ぶということは避けて通れないものです。「会話」においては文法偏重から脱却する動きも見受けられますが、「読み」「書き」

の分野では文法はやはり重要です。大学以降の学習のことも考え、まずは英文法用語を再度確認することからスタートしています。

リーディング学習では、大学以降のレベルではどのような文章を読むのかをまずは実感してもらうカリキュラムとして「コラム」を読んでもらっています。「英文を読む＝全文訳をする」というイメージを持ちがちですが、そうではなく、英文を英文として読むということに慣れてもらう内容にしました。一文一文を読むというよりも、そのコラム全体の趣旨は何か、注目していく読み方を紹介しております。

また、英語で何かを伝えるにあたって、簡単な文法であっても十分に英語で表現できるということを実感してもらうためにも「英作文」も取り入れました。結果、「難しく考えないで、もっと単純な英文でも良いことが分かった」という声を聞きました。

(3)本年度の受講生の印象

同じクラス内でも、中学の時点で英語学習が止まってしまっている学生や、英語資格の取得を目標に持つ学習意識の非常に高い学生と様々です。例年、講座内においても、一部の学力の高い学生にとっては手持無沙汰な内容がありましたが、2月期の受講生については、例年に見られるような講座の内容が基本的過ぎるという様子を見せる受講生はいなかったのではないかと思います。

授業内容以外についての受講生の様子ですが、昨年から見られる傾向で、授業態度や姿勢において、その意欲や意識を「表に出さない」で、授業で提供されたものを消化する学生が多いという印象を同じく持ちました。ただ、同じ趣味を持っている等のきっかけがあれば、何を学びたいのか意欲を示します。

実際、授業でアメリカンコミックの話をしたところ、授業終了時に、その受講生が好きな作品の中で出てきたセリフで意味が分からないところの質問を受ける等しました。その学生は、日本語訳が出版されていないものでも自分で購入し、辞書を片手に読んでいるそうです。いずれ、自力で読めるようになりたいから英語の勉強を頑張りたいという話をしていました。

学生が何を望んでいるのかを言語化させて、コミュニケーションをとりやすくするためには、リアクションペーパー等の手段だけではなく、数名の生徒に直接話しかけるくらいの「開かれた」試みがひよっとすると必要なのかもしれません。

(4)来年度への提言

本年はテキストの内容改訂が行われました。文法、発声等についてはここ数年のものを踏襲しておりますが、次年度はいよいよ「リーディング」「読解」については、受講生の興味・関心に対応した様々なジャンルのもを選出し、掲載し、英語で書かれた文章を「読む」ことのきっかけ作りに貢献できるカリキュラムにする必要があると感じております。

とりわけ英語を「読む」ことができるようになるためには、自分が興味・関心を持った分野のコラムや記事を読むことからスタートすることが望ましいです。そこで、英字新聞に掲載さ

れている様々な分野のコラムを教材としてピックアップし、授業内で扱い、受講生に英語で書かれた文章を「読む」ことの面白さに触れてもらう。そうしたカリキュラムの方向性で進めていくと良いのではないかと考えています。

2. 基礎数学完成

基礎数学完成担当 岡田安司

(1)授業の進め方について、昨年度までの課題は以下の3点でした

- ①進度を遅くすること
- ②学生同士で教え合うこと
- ③自分で考える時間を増やすこと

①はかなり前から取り組んで来た課題であり、順調に達成することが出来ました。また②については後に(2)で取り上げるので、ここでは特に③については考えたいと思います。

③については、今年度の学生は自分で考えて問題を解決しようとするが多かったように感じました。

理由は第一に、何より例年より学力が高かったことが考えられます。もともと自分で解決出来る学力があったために、自分で考えることに苦痛はなかったようでした。数学は英語や国語と違い、明確な数字の解答が出てこないと手も足も出ないところがあります。何から手を付けて良いか解らない、一寸先が真っ暗闇の状態になります。

そこで、ちょっと興味のある人はいろいろ突っ込んで工夫してみますが、本当に手探りも出来ないし、興味もわからない人は最初から投げ出してしまいます。これでは数学は勿論、数字を見ること自体が嫌になってしまいます。嫌になってしまうと、もう本当に数学を学ぶことが苦痛にしかありません。

しかし、今年は比較的学力が高かった為に、自分で考えることを全く放棄する学生が少なかったと感じました。学力向上の原因は定かではありませんが、結果としては満足がいくものになりました。

今年度、学生が自分で考える時間を持てるようになった理由の第二は、やはりテキストの内容を図形中心にしたことが考えられます。ある程度の知識がないと解けない時計算や仕事算では、自分で解決をすることが大変難しくなります。しかも計算の途中に分数式や単位の換算が入ってきたのでは、考えることを妨げる要素にしかならなくなってしまいます。

その点立体の展開図や円や角度などの図形では、特別な知識があまりなくても自力で考えることが可能になります。展開図を実際に紙に書いて切り取り、組み立ててみるとどんな形の立体だったかがわかり、自ら問題に主体的に取り組むことが出来るようになります。実際、正八面体の問題では自分で立体を作って来た学生がいて、感動させられました。聞いてみると、自分で考えて作って見たら案外うまく出来て面白かったとのこと。教師志望のその学生は、小学生の時に覚えたような喜びがあったらしく、将来こんな授業を自分でもやってみたいと話してくれました。さらに立体に紐をかけた時の展開図でも、実際に立体に紐をかけて考えた学生が何人かいました。こうした状況を見て思うことは、やはり教育というものは実施する側の人間も悩み考える必要があるのだということです。ただ数式とにらめっこをし、怪しそうな定理に

は証明を付し、といった型通りの学習だけでは、数学の一番根本である「考えて解決する喜び」は生まれにくいと思います。

以上、二点の理由から自分で考える時間を増やすという当初の目標が、ある程度は達成されたように思われます。

(2)学生の反応

自分で考える時間を持てるようになると、自分なりの答えが出ます。すると、周りで頭を抱えている人が聞いて来るようになります。「どうやって解いたの」とか、「こうやって解いたけど合ってるの」といったことです。最初に解いた人が、まるで先生のような立場になって考えを言います。自分の考えの正しさを説明しようとし始めたのに、逆にやり込められて「敗北」することもしばしばです。

こうして、不思議なことに上記(1)の②（友達同士で教え合う）が生まれて来ました。過年度において、私は(1)は②→③(自分で考える時間を増やす)の順に達成されるように認識していましたが、実際は逆でした。つまり、じっくり自分で考えるという段階があつて初めて、友達と教え合うということがあつた、ということでした。自分で考えてもないのに、人に教えたり教えてもらったりということはあまり考えにくいということです。

とすれば、やはり数学においてはじっくり考えないといけない。ちゃんと自分で考えないと何にも始まらないのではないかと考えます。

(3)今後のあり方

以上の考えを踏まえて、今後の授業のあり方としては、次の2点を提案したいと思います。

第1は、テキストを今まで以上に工夫して自分で考えることが出来る内容にすること。

第2に、自分で考える素材を日常生活の中に求めること。

第1の例としては、見取り図や展開図等の図形をもっと多く取り上げることです。図をもっと大きくして考え易くすることも大切です。

また第2の例としては、どういう買い方をすればいくらくらい得をするか、どう値段設定をすればどれくらい儲かるか。そんな身近な具体的な問題を設定することが大切です。

昨年度にも書きましたが、どう「考える」場を提供するかをもっと探求していくことが必要だと考えます。

3. 文系国語表現力基礎

文系国語表現力基礎担当 大槻 岳

1) 担当教科の実施概要・狙い・授業展開方法など

主に推薦入試での合格者を対象とする2月講座、主に一般入試での合格者を対象とする3月講座の両方において、担当講師作成による同一のカリキュラムで講座を設置した。

第1回「伝え方、考え方の基本」

第2回「論文の型1 原因追求型・論点指摘型」 ※課題提出（第一回必修）

第3回「論文の型2 功罪指摘型・賛否/選択型」 ※課題提出（3回と5回の選択必修）

第4回「論文を書くための要約」※要約課題

第5回「日本社会を考える」 ※課題提出（3回と5回の選択必修=第二回必修）

第6回「大学で学びたいこと」 ※課題提出（第三回必修）

第7回「平等と優先順位を考える」 ※グループ別演習

第8回「他人の作品に意見を言おう」 ※課題提出（第四回必修）

・講座運営概要（昨年度からの変更点を踏まえて）

各回は大学の講義に合わせ、90分授業で行った。前半で課題に関する説明を受け、後半で課題作成、講義内で書きあがらない課題については、後日提出を受け付けた。提出答案は、講師の指示を受けたスタッフが添削アドバイスをを行い、次回ないし次々回の講義内で返却を行っている。

文章への取り組み方については、大学での論文試験とレポートの双方に配慮し、書く前にメモを取り、構成を組み立てながら書き、そして書き上げた後は自分で答案を見直して修正を施してから提出するように促した（その際、「校正」のような形で余白に修正を書き込むことを推奨した）。今回の課題は手書きであるが、大学で取り組むレポートが容易に修正できるパソコン入力であることが多いため、このような形式を取った。

基本的にはこのような形式で講義を行ったが、第7回課題だけは「発表形式」とした。クラスの数に応じて5、6人程度のグループを作り、与えられた課題についてグループ内で議論をして意見をまとめ、代表者がクラスの前で発表した内容に対して、他のグループ、もしくは講師から質問を出して議論を進めた。課題が比較的取り組みやすい内容でもあり、生徒には授業当日に告知していきなり行ったにもかかわらず、他グループへの質問の有無、その指摘の鋭さに関しては個人差があるものの、全グループが与えられた課題についてしっかりと議論し、そして発表まで行った。

先述したように、いきなり書き始めるのではなく、まずはメモを取ることを意識づけるために、初回の講義では「伝え方、考え方の基本」として、ワークシートに取り組むという課題を実施した。内容は、自分が興味・関心のある話題に関して、「客観的知識」と「主観的意見」の双方を盛り込むこと、「客観的知識」に関しては調べて書いて良いが、それをどのように用いる

のかに個々の力量が問われるということを指摘した。

「(論文の前段階としての)小論文」として行った課題は、マナー違反、ニート、食への不安、環境問題、格差のない社会(以上第2回)、情報化社会、小学校の英語教育必修化、高校生のアルバイト、結果がすべて、日本社会の傾向(以上第3回)、一定の長さのある文章の要約(第4回)を踏まえての、若者に必要な能力、ボランティア(以上第5回)等、現代社会の様々な諸問題を課題とし、さらに受講生が自らそれらの課題を選択する形にすることによって、受講生に自主性を意識させるように心がけると同時に、自分が選んだ課題に対する責任も考えさせるようにすることで、課題未提出とならないように最大限の配慮をした。これまで同様、選択課題の割合も増やし、生徒に「選択」意識を持たせるように心がけた。

また、後半の課題としては、2月、3月講座ともに入学前準備教育の一環として行ったNPO法人カタリバのイベントを踏まえ、「大学で学びたいこと」について主に学習内容の観点から考えるように促す課題(第6回)、第7回のグループ演習を経て、最終課題としてこれまでの課題に答えた答案の中から選抜した「優秀作品」に対する評価を行い、今後の自分の取り組みについて決意を示す感想課題(第8回)という形で、全体としては4題の課題を書くことを受講生に求めた。

課題の提出に関しては、基本的に授業内および当日中の提出を求めたが、講義時間割の関係(時間割は基本的に固定であるため、常に一日の最後の講義となるクラスが存在する)や、生徒の受講状況や進捗状況に合わせ、講義実施日以降の課題提出も認めた。これにより、事情により休んでしまった生徒でも、後から課題を提出することができるとともに、意欲のある生徒は授業外の時間を活用して情報を加えることで、より精度の高い文章を提出することが可能になった。これにより、一部の生徒においては、大学生のレポートと遜色のない内容の課題が提出されることとなった一方で、第3回と第5回の選択必修課題においては、講義数としては二題の課題に挑戦する時間的余裕があり、意欲があれば挑戦できる状況であったものの、二題の課題に挑戦した生徒は2月講座で1名、3月講座では4名という極めて少ない数字となり、必修とすることによる強制力の意義、および学生の自主性、向上心の欠如と向き合う結果となったことも事実である。

なお、各課題の提出数、提出率については、以下のようになっている。

	受講者数	第一回	第二回	第三回	第四回	全て出した学生
2月講座	99名	84	72名	53名	65名	39名
提出率	—	84.85%	72.73%	53.54%	65.66%	39.39%
3月講座	99名	60名	57名	38名	41名	23名
提出率	—	60.61%	57.58%	38.38%	41.41%	23.23%

※未提出者が「欠席」して未提出なのか、「出席」しながら未提出なのかは調査していない。

以下は「講座の報告」ではなく「講師の所感」であるため、「敬体」で記す。

2) 受講生の印象

・受講生の気質に関して

まず特筆すべき点として、聖学院大学においては進路に対して前向きな意欲を持つ学生の割

合が、特に推薦入学の生徒に多いといえます。聖学院大学が設置している学部・学科が専門性の高いものであるということもありますが、大学として「質の良い」学生を取るという前向きな姿勢が実りつつあるという、募集における理想的な印象も受けます。

その一方で、「やる気」はあるものの、具体的には何をしたらいいのかわからないという学生も昨年同様、多く見受けられました。たとえば一般入試を経てきた学生であれば、「勉強をこれだけやってきた」という一定の達成感を持ちえますが、受験の早い段階で推薦によって合格してしまった学生は「高校の最後でこれを頑張った」というものがないため、「未来に向けての気持ち」と「何らかの実績」との間に乖離が見られます。

また、これは例年の学生に見られる傾向ですが、学力以前の段階で「自信を失っている生徒」も見受けられました。今回の「大学で学びたいこと」課題では、小中学校でいじめの被害者となったり、病気で長期の入院を余儀なくされたりするなど、必ずしも順調とはいえない道りを経てきたことを告白する学生もいました。もちろんその一方で、そのような経験を乗り越え、学生生活を前向きに送ることを目標としている学生も存在します。

一般入試での進学組においても、「第3希望の大学(聖学院大学)にやっと合格できました」など、受験勉強でも思うような成果が果たせなかった(俗に言う「不本意入学」である)ことを告白してくれた学生もいました。モチベーションが低い状態で講義を受けても、やはり効果を望むのは難しいため、そのような生徒に対しては何よりも盛り上げる姿勢が最重要課題となります。

聖学院大学に入学してくる生徒は、必ずしも高等学校で好成績を収めていたり、一般入試で第一志望として合格したりした学生ばかりではありません。これは他の大学でも言えることですが、推薦入試というのは多くの大学が単願・専願にしていることもあり、その大学および学部を「第一志望」で入学してくる、いわば非常に意欲の高い生徒が、一般的な偏差値のランキングにかかわらず存在します。上記のように、聖学院大学においてもそのような生徒は多数おります。また、その一方で同じ推薦入試であっても、「学校の先生が薦めてくれたから」「オープンキャンパスのときのスタッフが優しかったから」など、本来は自分の一生に関わるような重大事であるといっても過言ではないような大学選びを、非常に安易に選択してしまっている受験生がいるのも事実です。

同様に、一般入試で合格してくる学生のなかにも、上記の学生のように、他大学、あるいは聖学院大学の他学部の受験に失敗して入学してきた学生が一定数います。これは、どの大学においても一定数いると思われそうですが、高等学校在籍時に「目立たなかった」生徒ほど、自分の進路というものと真剣に向き合う機会が少なかったこともあり(成績・課外活動等にある程度目立つものがなければ、なかなか推薦入試での合格に繋がらないため、このような生徒は最初から推薦入試という手段を選択しない傾向にあります)、大学・学部学科、引いては将来に対して明確なイメージを持たずに入学してきます。

もちろん、そのような生徒は大学生活のなかで、自分の目標を見つけることが多く、また大学とはそのような場でもあるべきですが、ともあれ、入学前というこの段階で、自分の将来に対して非常に高いモチベーションを持っている生徒と、そうではない生徒が教室内に混在しているということは、大いに配慮すべき点であり、それは推薦入試の合格者だから、一般入試の合格者だから、と安易に二分化できない問題であると考えます。

・受講生の文章力に関して

この入学前準備教育は、レベル然り、入学方法然り、非常に様々なタイプの生徒が受講しております。非常に多彩な入学試験を展開している聖学院大学は、その受講生の多様さは、偏差値教育で輪切りにされた集団では考えられないほど複雑であり、そして、その多様さは元々様々なレベルに対応していくことが求められる表現力教育においても同様です。

学力的な面で生徒をみると、一般入試などで求められている「偏差値的な学力」では苦戦する生徒がいるかとは思われますが、論文というものは「1. 自分の思っていること」を「2. 文章に表わす」という作業であり、1に関しては受験で求められている一般的な学力とは別の地平で図られるものであって、2に関しては高等学校等の授業そのもので（以前よりは重視されているとはいえ）体系的に取り組む機会が少ないために、輪切りにした偏差値で聖学院大学を上回るであろう他の大学の新入生たちとそれほどの差がついていないということは、様々なところで表現力指導を行っている講師の眼から見ても明らかです。

近年の受講生の特徴としては「課題に立ち向かおうとするものの、全く書けないまま固まってしまう」という受講生は減少しており、「何かを伝える」という意志は、多くの受講生から感じられました。昨今の「表現力」に対する教育熱、あるいはそれを感じ取った受講生の意識の高さというものはそこかしこに根付いていると思われます。このことは、先述した「課題の提出率」にも表れているといえます。課題の提出率の数値については様々な解釈があるとは思いますが、学校行事や家庭の事情等で必ずしも全部出席することができる学生ばかりではない状況を考えると、特に2月講座の提出率はまずまずの成果が出ているのではないかと講師は考えております。

その一方で、講座に参加しているものの、課題に取り組まない学生というのも、特に3月講座を中心に一定数いたことも事実です。これらの学生については、入学前ということ を考慮し、「大学は自分から学ぼうとしない学生の『自由』を認めるどころであり、その代償は単位を付与されないという結果として現れる」ということを全体に向けて何度も説明するに留めました。講座に前向きに参加している学生の底上げを図るのか、課題に向き合わない学生を拾いにいくのかは、現場の講師が常に悩むところではありますが、このような問題はすでに入学前の段階から見られるということが明らかとなりました。

文章表現そのものについてですが、高等学校における「文章力」指導が、いわゆる「作文」になってしまっている学校も多いように見受けられ、自分が自信をもって書いている文章が、主観的な感情を羅列しているもの、偏向的な意見を繰り返し続けているものなど、論文が求める「客観性」とはかけ離れた内容になっている答案が増加していることは昨年も指摘したのですが、今年度もそのような答案は数多くみられました。

自分の文章を客観視する能力というものが身に付いていない答案の具体例としては、「課題文の要約が出来ていない」「自分の思いだけを繰り返してしまい、結果的に内容が破綻してしまう」「一方的な意見だけを述べてしまい、文章が攻撃的とも取れる」というようなものです。そして、残念ながらこのような学生は例年増加傾向にあります。

「表現力」というものは、ただ自分の考えだけを一方的に述べるものではなく、その状況に応じて適切な手段を取るべきものであるはずですが。このことは、ワークシート課題として実施した講において、欄外までびっしり箇条書きを書いている生徒がいる一方で、それぞれの枠に

一言ずつしか記載しない生徒も多数いることでも証明されました。この原因は、文章を書くこと（自分の想いを伝えること）を「面倒くさい」と思って思考停止していることが最も大きいと思いますが、ある程度の説明で相手に伝わると誤解している生徒がいるのも要因の一つであると考えます。このような自分と他者との認識の違いに配慮できない「説明不足」を解消することが、文章力上達の第一歩であり、それはそのまま他者とのコミュニケーション力の向上につながっていくと考えます。

それに加え、いわゆる「話し言葉で書かれている文章」や「一文の構造が破綻している文章」の割合が、ここ数年どんどん増えているということも事実です。これは今年も答案にも数多く見受けられました。それはすなわち、高等学校で文章を書かせる経験を積ませていたとしても、それはあくまでも「感想」や「作文」でしかなく、客観的な文体で文章を組み立てる「小論文」のトレーニングをしてきた生徒が少なくなっていることを表しているように感じられます。

これらの点については、先述した「表現力のトレーニング」や、講座で取り組んだ答案の「話し言葉」や「文構造の破綻」についての赤字訂正はもちろん、「客観的な文章」というものの表現形式がどのようなものであるかを視覚的に理解させるとともに、意見に関しても自分の主張だけを述べるのではなく、自分とは違う意見を持つ相手や、読み手を意識することの大切さ、そして自分の意見のほかにも、複数の選択肢があるという視野の広さを身につけることの必要性について、講義のなかで学生が実感できるようにしております。

その結果として、自分が取り組んだ課題について、他の受講生の文章を読み、感想を書くという最終課題において、良いところを認め、自分のなかに取り込んでいこうとする成長を見せた受講生が多数見受けられました。

また、問題点に関するアドバイスを受けて書き直した文章の多くは見事に修正され、非常に客観的な構成を用いることができるようになっており、受講生の良い意味での「素直さ」というものにも多数触れることができました。

この入学前準備教育は、単なるリメディアル教育ではなく、従来の入試ではあまり重視されなかった、しかし大学および社会において必ず求められる問題を、分かり易い形で生徒に提供することを主眼にしております。そういう意味では、この講座に前向きに取り組んだ受講生であればあるほど、大学入学後に「自分」という存在を確立させて大きく飛躍できる可能性が生じることを大いに期待して、講師は講義を運営しております。

3) 生徒の優秀答案例 (第2講 第1回必修選択課題1 課題3 食への不安)

課題3「食への不安」(原因追求型)

近年、食品にまつわる様々な不祥事・トラブルが明るみになってきており、「食の安全性」が脅かされている。あなたが特に気になっている問題を取り上げ、私たちの食に関する不安が広がっていることについて、自分の考えを600字程度で論じなさい。

《2月講座》コミュニティ政策学科 男子

日本は水道水を直接飲むことができる数少ない国である。口に入れるものはすべて安全だと思いついて入っているのかもしれない。近年、食肉に関する事件、加工食品や外食産業での賞味期限

改ざん等、食品に関する事件が発覚して大きな問題となっている。

数々の事件の中でも、中国から輸入された冷凍食品にメタミドホスが混入され、それを食べた人が中毒症状を起こした事件がある。我が国の食料自給率は39%であり、先進国では最低の水準である。手軽に食べることができる人気の高い冷凍食品は、年々輸入量が増加している。国内で製造するより安い費用で製造できるために、輸入に頼ってしまいがちである。他にも、牛肉の輸入問題も、やはり海外の管理体制の低さが露呈した事件であり、これも輸入したほうが安く手に入るからと、海外のものに頼ってしまっている。

二つの問題に共通するところは、なるべく安いものを手に入れようとするため、海外の製品に頼ってしまうことにある。その影響により、日本の食料自給率が39%と、先進国の中でも低くなってしまっている。つまり、国内での食料自給率を上昇させ、国内での製造生産を増やせば、中毒事件等を未然に防ぐことができる。自分たちの目で見て選び、全ての食品が安全ではないことを頭に入れる必要が出てきたのである。

安全な食品を購入するにはどの店の、または誰が作ったのか、消費者自身が情報を集め、考えることが必要である。

《2月講座》人間福祉学科 女子

近頃、外国産を国産と偽る事件や本来使われるはずのない肉をひき肉として売った食肉偽装事件など、食の信頼が低下し、食への不安が高まっている。

このような食の偽装が行われる原因は主に2つある。1つは利益が出るからだ。2008年のミートホープ食肉偽装事件では、ひき肉の中に豚の心臓を使い、偽装ミンチとして販売していた。豚の心臓は安い。それを普通の肉の代わりに仕入れ、値段をそのままに販売すれば相当な利益となる。利益を求めすぎる企業の姿勢がこのような偽装に手を出してしまうのだろう。

2つ目は、外国産だとなかなか売れないからだ。日本人にとって国産というものは、1つのブランドのようなものである。そして残留農薬問題で中国産を嫌がる消費者が増えた。中国産のものをそのまま売るのは難しいと、中国産のフグを国産と偽って販売されていた事件もある。フグでなくうなぎや米など、様々な食品で産地偽装が行われている。消費者の国産へのこだわりと、外国産へ対する不信感がこのような事件を生み出してしまうのだろう。

このような偽装から身を守るためには、まず値段を見て安すぎないか考えて買うといい。国産とあるのに、驚くほど安いものは外国産の可能性があるのである。また、農家と契約するのもいい。農家単体や農業協同組合から直接こちらへ出荷物を郵送してくれるサービスを利用すれば、製造者の顔も分かり安心して食品を手にする事ができるのである。

消費者の立場で、食品に示された偽装を気づくことは難しい。しかし、その表示を鵜呑みせず考えることを意識していくことが大切である。

《3月講座》児童学科 男子

今日では色々な食品への問題点がある。鳥インフルエンザ・狂牛病・毒の混入・異物混入といったさまざまな問題点やトラブルが存在する。

なぜこのようなことが起こってしまっているのか。これは日本や世界の急速な経済の発展に問題がある。世界の経済が発展していき、資本主義社会が主流となってきている。そして会社

と会社が利益を増やすことを目標にしている。そこで少しでも商品にかける予算を減らし、低コスト商品を作り出したために生まれた問題だ。低コスト商品を作り出すためには、人件費を少なくする、エサなどを安いものにする、製造するための点検をしないなどが挙げられる。それが原因でこの問題は起こったのだと考えられる。

これらの問題を解決するには、制度をつくる必要がある。例えば雇用者の最低の人数の制限、エサなどに病気の原因となるものが混ざっていないか確認するシステム、商品を製造するのに必要な機械などを定期的にチェックする制度などを作っていく必要がある。細かく厳密に決めておくことで、このような問題やトラブルを減少させることができるに違いない。

今では多くの食への不安、トラブルが見られている。しかし、それらは厳密な制度を決めることで対処することができる。問題が起こったら制度や決まりを作り、食への不安、トラブルを減らしていくことが最も必要なことである。

《3月講座》こども心理学科 女子

今、日本の社会では放射能の影響で「汚染食品」が世間を賑わせている。子供を持つ母親たちは自分の子供の健康を考え検査済みであっても東北産の食品を避けている人がほとんどのようだ。なぜなら、福島原子力発電所の事故で、東北の農家や漁業が放射能で汚染されてしまったからだ。

放射能と言うのは、言ってしまうえば私たちの「見えない敵」と言えるだろう。その見えない敵と戦っていくためには確りと検査をして安心した食品作りに励むということが大切である。しかし、ある一部の地域ではまだまだ心配が残る所もあるようだ。

恐ろしいことにトラック一台相当の野菜がほんの一部の抜き打ち検査で検出されるそうだ。検査無しで出回っているものがどれだけあるか。さらに、ある地域では数回の検査でどれも基準以下ならば次の検査から無検査になるそうだ。数回の検査でもう反応が無いから検査不要ということでは、いつまでたっても食への不安はなくなるまいだろう。

では、このような事が今後おこらない様にするためにはどうしたらよいのだろうか。私はもっと日本の政府が原発や放射能汚染について口ばかりだけではなく、行動をおこしていかねば、改善するのは困難だと考える。食というものは人間にはなくてはならないものだ。食べ物がないと成長することができない。今後、成長し活躍が期待される子どもたちのためにも、もっともっと見直しをしていかなければいけない点がある。

まずは、安心して食べられる食品づくりのための施設設定などをし、一つひとつ検査をしていかなければ何も前進することはないだろう。

小論文実作・添削例

ここでは、第2講「食への不安」と第4講「ボランティア」を例に掲載をする。
原稿用紙の右の欄が添削欄。右下のローマ字が評価となっている。

(1) 第2講「食への不安」

■ 人間福祉・AO・さくら国際・女

聖学院大学小論文 原稿用紙				
教科名	国語	学部名	人間福祉	クラス
第[3]講	学名	人間福祉	学名	氏名
タイトル 「食への不安」				

○近頃、外国産を国産と偽る事件も本来自ら使わなければならない肉と魚を売った食肉偽装事件など、食の信頼が低下し、食への不安が高まっています。

○このような食の偽装が行われる原因は主に2つあります。

①一つは利益が大きいからです。2008年のミニートホニア食肉偽装事件では、ミンチ肉の中に豚の心臓を使い、偽装品として販売していた。豚の心臓は安い肉を普通の肉の代わりに仕入れ、値段を上げるのみに販売すれば利益となる。利益を求めず企業姿勢がこのように偽装は年々増えつつあります。

②二つ目は、外国産が安く売れるからです。日本では残留農薬問題で中国産を嫌がる消費者が増えました。中国産のものをそのまま売るのは難しいと、中国産のミンチを国産と偽って販売していた事件もあり。フグではなくうなぎを、様々な食品で産地偽装が行われています。消費者の国産へのこだわりと、外国産に対する不信感がこのように事件を生み出してしまうのだと思います。

○このような偽装から身を守るためには、まず値段を見ても安心できないか考えて買うといいです。国産と偽るには、驚くほど安いものは外国産の可能性があるので。また、農家と契約するのでもいい。農家単体や農業協同組合から直接こちらへ出荷物を郵送してくださるサービスを利用すれば、産地者の顔も分かり安心して食品を手に入れます。

○消費者の立場で、食品には示された偽装を気付くのは難しい。しかし、その表示を鵜呑みにせず考え直すことも意識していくことが大切だと思います。

食への不安に関する事例が、巧みに書かれてあるので、Very goodです!!

Memoがフル活用されており、素晴らしいです!!

利益を上げたいが、いもうけられぬまま生きていけない。産地というブランドにこだわる。国産と中国産は、国産の方が安全というイメージがある人が多い。

現状、安く売りたい。詳しく不景気の今、高い物は売れない。農家と直接契約し、信頼(農協)で生かすのを届けてもらう。

いくらなんでも安心できないか、他人と比べて買う。

背景原因の入り目で、何故安心できないのかについての説明。その後二つの原因(産地ブランドにこだわる人が多い)を挙げ説明。その後提案の。まとめは表示のしやすさや、気配りのしやすさなどが重要である。

調べたら、食偽装について調べた。背景が列挙型で詳しくまとめている goodです!!

◎コメント
構成の流れに沿って詳しく書かれており、要約して、600字程度で載せることを目指しました。

評価 (A)BCD
Good

(2) 第4講「ボランティア」

■ 政治経済学科・推薦・山形学院・女

聖学院大学小論文 原稿用紙				
教科名	国語	学部名	政治経済	クラス
第[11]講	学名	政治経済	学名	氏名
タイトル ボランティア				

○東京都教育委員会は約200ある都立高校のすべてで「奉仕体験活動」を必修教科とした。年に35時間がこれに充てられている。

○ボランティアの利点は、教育効果では活動を通じて「自信が育つ」「社会への関心が高まる」など意識の変化が見られることだ。学習効果としては今の若者に求められている互いの違いを理解して尊重する、社会人に必要で常識や能力を得られる、人生の目的や意識を考えた点がある。

○問題点は「必修化」にすることでボランティアがなくなってしまう可能性があることだ。ボランティアの本来的な意味は志願者である。必修は志願して受けるものではなく強制で受けなければならぬ授業である。ボランティアの意味を考えると、「必修化」にすることは矛盾しているのではないだろうか。

○解決策としては生徒から活動したいと思わせるような内容にすることが考えられる。それには、地域社会の力が不可欠である。地域全体でボランティアを盛り上げれば生徒も自ら活動し、ボランティア本来の意味に近づくことができるはずだ。学校側は必修教科にするのであればこのような配慮も必要であると考えられる。

○結論として、学校側はボランティアを必修教科にするのであればその準備をするべきだ。そうしなければボランティア本来の意味を失ってしまうからである。

MEMO OKです!!

現状 東京の高校で必修でボランティアがある。現状がよく書けています GOODです!

×リスト 自分から社会への関心が高まる 人生の目的や意識の若者は求められていないから、ものごとく行われる。

デメリット、「必修化」=単位。受けたいと単位をもらえ

ボランティアの意味 志願者ではなく、自由な意志が前提の活動

解決策: 必修化に反対は、70%から、でも生徒から活動したいと思わせる。なので、地域社会に協力してもらう。

◎コメント
Xももしかりと書いているので OKです。整理した文章にしています。最後も、とじて手動的にたりに、いようは書くことと、オスス×します。頑張りました!!

評価 (A)BCD
Good

参 考 資 料

英語集中講座報告

掲載記事

2013 年度英語集中講座報告

欧米文化学科教授 M. サベット

新入生は、高校時代とは全く違う新しい世界に異なった期待をもって聖学院大学に入学してきています。彼らは今までとは違った講義を受け、課題を与えられる中で自主的に考え、学習プランを立て、目標を設定すると同時に、新しい場所に慣れて、新しい友達をつくらなければなりません。それは、とても大きな変化です。

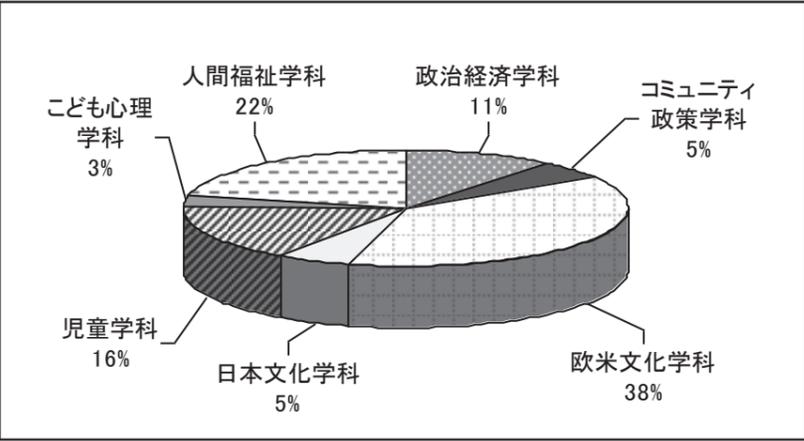
この講座は、新入生がこのような大きな変化に対応できるよう手助けをすることを目的としています。クラスでは、コミュニケーションのアクティビティを取り入れ、できるだけ多くの友達を作り、スピーキングに自信がもてるように配慮しました。クラスには、英語能力レベルの違う学生、モチベーションに違いのある学生、控えめな学生、それぞれ違った参加目的を持った学生が参加しました。フレンドリーで積極的な学生も沢山いましたが、ひとりで座っている学生や英語を話すことに消極的な学生もいました。しかし、授業で毎回異なるスキルを学び、毎日違うパートナーと会話練習をすることにより、学生が少しずつ恥ずかしながら、課題に取り組み、フレンドリーになっていく様子が見えてきました。静かだったクラスが、講座終了時には、皆が打ち解け、とても賑やかな、温かい雰囲気のクラスとなりました。

5 日間の授業で、学生の見違えるような明るい姿を目にすることができたことは、教員として大変幸せなことです。英語集中講座は、新しい環境に飛び込む新入生にとって、大変有益な講座だと思います。

英語集中講座受講者数（全講座） 37 名

- ベーシック・イングリッシュ 30 名
- ステップアップ英語 7 名

ベーシック・イングリッシュ、ステップアップ英語 学科別受講者数



A. ベーシック・イングリッシュ English Time

講師：メヘラン・サベット / K. O. アンダスン

1. 講義概要

このクラスは、4月から聖学院大学で勉強をする英語のクラスに慣れ親しむことを目的としています。講座では、サンプル・レッスンをもとに、アクティビティーを取り入れて、課題に取り組みます。

1日目：「クラスメイトを知ろう！」コミュニケーション方法

Session 1: Get to know everyone better. Communication strategies

2日目：「サバイバル英語」海外旅行で必要最低限の英語を学ぶ

Session 2: Survival English. Survival skills while traveling abroad

3日目：「English through Songs」英語でアーティストや歌について学ぶ

Session 3: English through Songs. Learn about artists and songs using English

4日目：「英語で楽しく」楽しいアクティビティーで、英語を上達させる

Session 4: Fun with English. Improve your English through fun activities

5日目：「自然にコミュニケーション」友達やクラスメイトと英語を楽しく話す

Session 5: Communicate naturally: Enjoy speaking English with friends and classmates

2. 講義スケジュール

Day 1: 2月26日(火)

時限	時間
オリエンテーション	9:45~10:00
1時限	10:00~11:00
2時限	11:10~12:10

Day 2: 2月27日(水)

時限	時間
1時限	10:00~11:00
2時限	11:10~12:10

Day 3: 2月28日(木)

時限	時間
1時限	10:00~11:00
2時限	11:10~12:10

Day 4: 3月1日(金)

時限	時間
1時限	10:00~11:00
2時限	11:10~12:10

Day 5: 3月5日(火)

時限	時間
1時限	10:00~11:00
2時限	11:10~12:10
閉講式	12:10~12:30

※欧米文化学科の在学生5人が日替わりで学生スタッフとして参加。

英語でのアクティビティーで受講生をサポートするなど、講義の補佐を行った。

※ベーシック・イングリッシュは、2クラスに分かれて授業を行い、それぞれメヘラン・サベット先生、K. O. アンダスン先生が1クラスずつ担当した。

B. ステップアップ英語 Step Up English

講師：島田洋子

1. 講義概要

リスニング・スピーキング・リーディング・ライティングに役立つ基礎文法力アップの講座。資格試験でスコアをアップしたい、または英語の4技能をもっとフルに活用したいと思っている人のために、短期間で集中して文法の見直しができる講座を用意しました。この講座は文法の説明だけでなく、短い会話を含めた口頭練習を取り混ぜて、より英語らしい英文の表現が出来るように、総合的な英語力アップを目指します。欧米文化学科で「英語強化プログラム」に参加したい人や、留学・資格試験の受検を考えている人には特にお勧めです。

1日目：よく間違えるbe動詞と一般動詞の違い、現在時制と現在進行形の違い

2日目：未来時制と過去時制を使って自分や周りの人について表現しよう

3日目：完了形っていつ使うの？微妙な気持ちを表す助動詞の使い方

4日目：会話に役立つ疑問文や否定文の作り方、受動態の見直し

5日目：資格英語テストに良く出る不定詞と動名詞の違い、奥の深い動詞の使い方、まとめ

2. 講義スケジュール

Day 1: 2月26日(火)

時限	時間
オリエンテーション	8:45~9:00
1時限	9:00~10:30
2時限	10:40~12:10
各自昼食	12:10~13:00
3時限	13:00~14:30

Day 2: 2月27日(水)

時限	時間
1時限	9:00~10:30
2時限	10:40~12:10
各自昼食	12:10~13:00
3時限	13:00~14:30

Day 3: 2月28日(木)

時限	時間
1時限	9:00~10:30
2時限	10:40~12:10
各自昼食	12:10~13:00
3時限	13:00~14:30

Day 4: 3月1日(金)

時限	時間
1時限	9:00~10:30
2時限	10:40~12:10
各自昼食	12:10~13:00
3時限	13:00~14:30

Day 5: 3月5日(火)

時限	時間
1時限	9:00~10:30
2時限	10:40~12:10
各自昼食	12:10~13:00
3時限	13:00~14:30
閉校式	14:30~14:50

※欧米文化学科に入学予定の受講者へは、入学後に選択して受講する科目「テスト・イングリッシュB」として1単位を認定。最終日には、授業内容に関するテストを行った。

アンケート結果（ベーシック・イングリッシュ English Time）

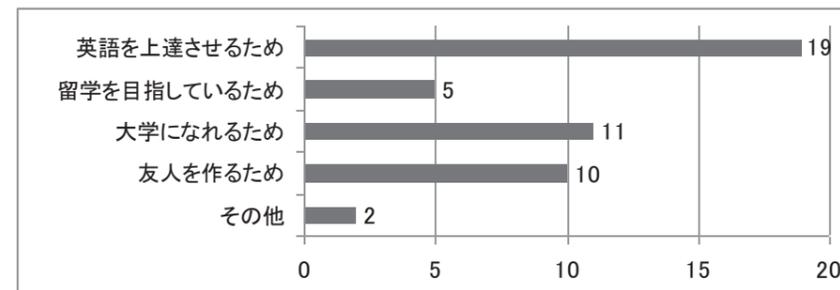
英語集中講座 A（ベーシック・イングリッシュ）最終日に、受講生に記入してもらったアンケートより集計。（グラフ内数字は人数を表す）

※英語集中講座 B（ステップアップ英語）は受講者が少なかったため、アンケートは割愛した。

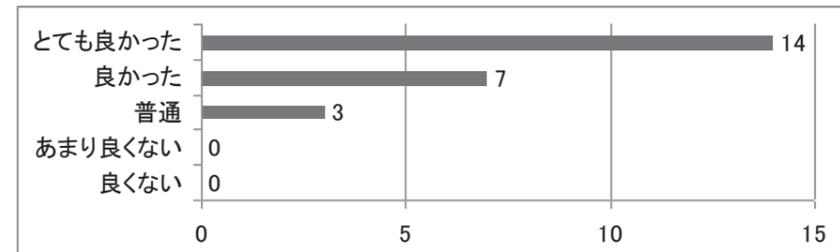
回答率

回答数	英語集中講座A 受講者数	回答率
24 人	30 人	80%

1. 英語集中講座を受講した理由は何ですか？（複数回答可）



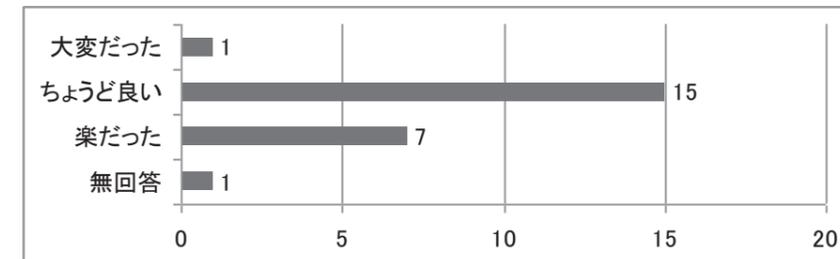
2. 授業の内容はどうでしたか？



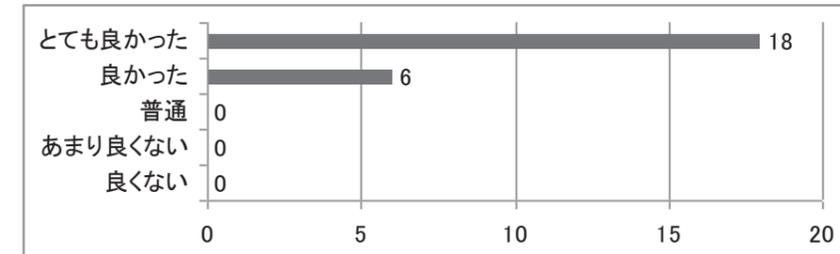
3. 授業のレベルはどうでしたか？



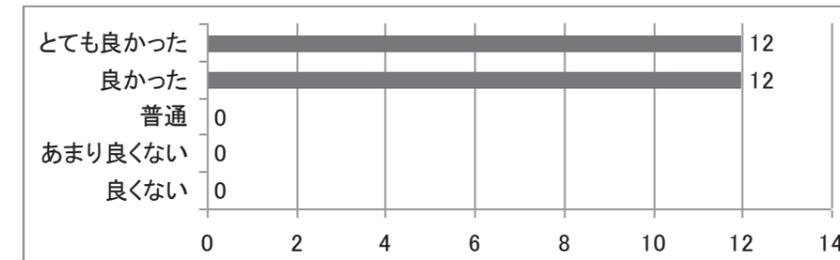
4. 授業のスケジュールは高校の授業に比べてどうでしたか？



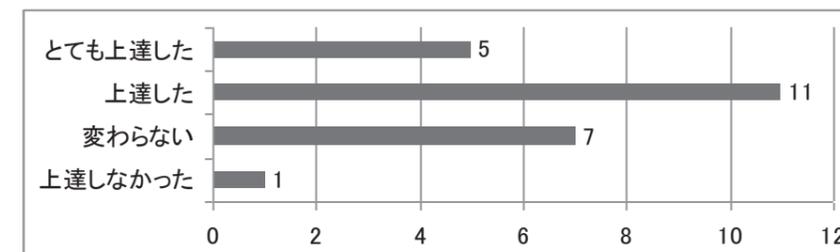
5. 講師の教え方はどうでしたか？



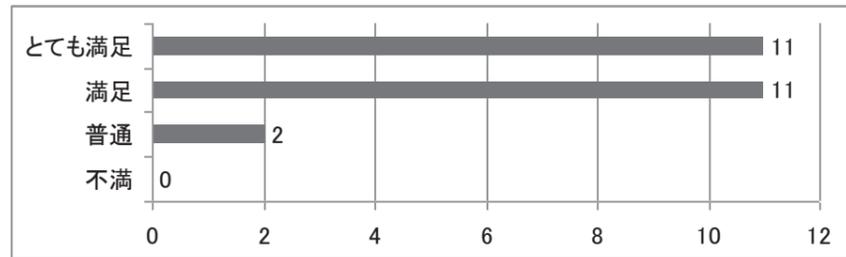
6. 学生スタッフはどうでしたか？



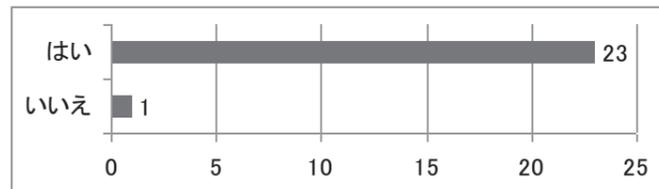
7. 英語力は上達しましたか？



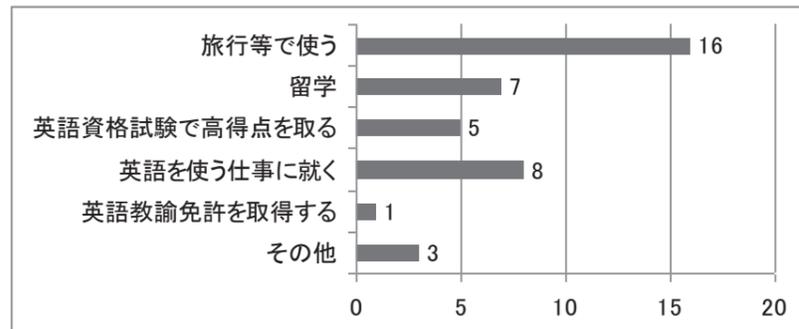
8. 講座は全体を通してどうでしたか？



9. 英語を勉強する意欲は増しましたか？



10. 入学後、英語を使ってどうしたいですか？



受講生の感想

- ・英語嫌いが直ったと思います。へたな英語でも通じて、もっと勉強したいと思いました。
- ・バリバリ書くものだと思っていたら、話したりするのが主でよかったです。会話力の向上にもつながったのでは、と思います。
- ・とても楽しく授業を受けることができたので良かったです。もっと英語を勉強したいと思えました。
- ・入学前に友人などできてよかったです。先輩の話が聞けたのもよかったです。
- ・高校の板書を主とした授業よりもずっと楽しかった。
- ・英語が楽しいことを知って、もっとやりたくなりました。

ベーシック・イングリッシュ

講師と受講生によるアクティビティの様子



掲載新聞記事

読売新聞朝刊
(2013年4月10日)

満開の桜に彩られた聖学院大
学(埼玉県上尾市)のキャンパス。入学式前の3月末にもかかわらず、校舎は拍手と笑い声に包まれていた。
「文武両道で頑張ります」と宣言する男子がいれば、「自分の意見を持てるよう勉強します」と声を張り上げる女子も。「イケメンになって、楽しく過ごしたい」と締めくくった男子に、教室がわいた。
集まったのは同大入学予定の3分の1にあたる約200人。国語、英語、数学を学び直す11日間講座の参加者だ。最終日は「かっこいい大学生になるために」をテーマに決意表明が行われた。
発表の後は拍手を送る、からかいが厳禁——がルール。人前で発表するという大学生として



No.1756

教育ルネサンス 新入学を前に 4



入学式前に、大学生生活の抱負を語り合う入学予定者たち(埼玉県上尾市の聖学院大学で)

大学生活へ雰囲気作り

の素養を培う場だが、何より入学者同士の信頼関係作りを狙う。
「大学での学びの第一歩。本番はこれからです」。入学前教育を推し進めてきた同大の山下研一・広報局長(58)は言う。
入学前教育に取り組む大学が増えている。読売新聞の「大学の實力」調査によると、2008年は327大学だったが、昨年は517大学に増加。私立は約9割が実施しており、国立でも6割以上が行っている。2人に1人が大学進学を選ぶ時代、基礎学力が足りなかったり、意欲が乏しかったりする学生に、多くの大学が悩む。そこであらかじめ実態をつかみ、入学後の教育に生かそうという発想だ。
聖学院大も「授業が成り立たない」という教員の悲鳴を背景に13年前、推薦などで入学が決まった高校生を対象に始めた。希望者をテストで成績別クラスに分け、独自教材で基礎からやり直す。授業は予備校の講師に依頼した。
回を重ねるうちに山下さんは、入学予定者が勉強だけでなく友だち作りにも不安を抱いていることを知った。
このため入学前教育に、先輩学生十数人も配置。入学予定者の相談に乗ったり、溶け込みやすい雰囲気作りを手伝ったりするよう協力を求めた。講座に広がる
次のシリーズは、体罰を防ぐ取り組みをお伝えします。
◇ (編集委員・松本美奈)

がる明るい雰囲気はその成果だ。目に見えて成績が向上するわけではないが、「入学前教育を受けた学生がクラスのリーダーになり、授業がしやすい」などと教員からは好評だ。
参加者の満足度も高い。通信制高校から進学する遠藤貴士さん(21)は「友だちができた。いいスタートができそう」と笑う。
大学生活への「軟着陸」を促そうと、入学式前に教職員も交えて合宿をしたり、保護者会を開いたりする大学も多い。
小学校から大学まで、新しい学習環境に慣れる過程を、あの手この手で支える時代。春本番を迎え、入学前の取り組みが各地で花開くことを期待したい。

